

# 清末小説から 119

2015.10.1

いくたびかの阿英目録11.....樽本照雄 1

《領鈕》の原作.....渡辺浩司13

漢訳『奇獄』の謎1 問題提起篇.....沢本香子24

注目点4：『官場現形記』の海賊版.....樽本照雄35

林紓冤居事件 “琴南移寓芝麻街” 是否指林琴南？.....古 二 徳42

清末小説から46

お知らせ 『清末民初小説目録X(エックス)』を公開準備中です。予定より早くなるかもし

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録11

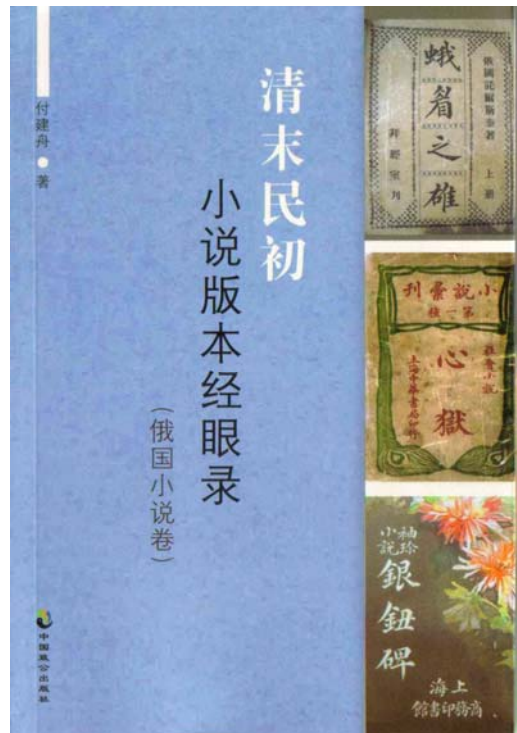
樽 本 照 雄

藍文海漢訳『父与子』の刊年と底本

(俄)屠格涅夫(ツルゲーネフIvan S. Turgeney) 著、藍文海訳述『父与子』については、ふたつの問題がある。

先に漢訳版本の刊年が議論された。それにともない漢訳がもとづいた底本は何かという問題が検討すべきものとして浮上している。

最近問題にしたのは、付建舟『清末民初小説



版本経眼録・俄国小説巻』(2015)\*28の「附：父与子」だ。

題名に「附」をつける。附録とした理由は、

本来ならば清末民初小説の範囲をはずれる版本だからに違いない。

問題の1 その版本刊年について、今までの記述の流れを簡単に説明する。

藍文海訳『父与子』啓明書局版は、『中国現代文学総書目』に収録されたとき、刊行が1896年になっていた。専門家がその記述に従った。のちに平保興が1936年3月だと訂正した。平説が研究者に引用され現在にいたっている。このたび、付建舟がさらにそれを否定し、刊年を1939年3月に特定した。実物で証拠を示す付建舟の学術的努力が成果を生み出したとって過言ではない。高く評価されて当然だ。

付建舟の記述は、実物で確認しているのがよい。表紙奥付など関連する部分を写真で示しているのが証拠だ。資料として役に立つ。

1冊の訳本を説明して初版の刊年が、1896年から1936年、1939年へと変化していった。その経緯を説明しよう。

清末民初から遠く離れた1939年の刊行物が、なぜ樽目録に収録されたのか。これから始めなくてはならない。



前出、賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学総書目』(1993)\*29の附録2「1882-1916年間翻訳文学書目」が起点だ。樽目録の採取対象年代と重なる。

『父与子』は、892頁に「啓明書局1896年出版」だと明記されている。これは疑うことなく十分に清末翻訳小説である。『父与子』の漢訳には、耿濟之、陳西滢、黄源、李連萃、巴金らのものが知られている。それらをさしおいて藍文海のみが取り上げられるのは、清末時期に刊行された翻訳だからだ。樽目録第2版(1997)から『中国現代文学総書目』が典拠だとわかるようにして1896年刊行を採録した。第3版(2002)でも変更はない。

阿英目録には収録されていない作品だが、そういう例は多い。不思議だとは思わなかった。

樽目録第4版(2011)では、平保興論文(2007)が該訳の刊行を1936年3月に訂正したのでそれを備考欄に追加している。



平保興論文とは「關於《父与子》的出版年代」\*30だ。それより14年前に賈植芳らが公表し記述し

た刊年を否定して次のように書く。原本にもとづいた説明だろうからそのまま引用する。

「中訳本《父と子》依據の藍本はThomas Seltze<sup>ママ</sup>的訳本、并参照米川正夫の日記本訳出。巻前写有Hogarth写的《序文》」79頁、「此書為“世界文学名著”之一、它的出版時間應為1936年3月、1948年和1949年重版(第三版)」80頁

それによると漢訳本文は、セルツァー英訳本が底本だという。米川正夫の日記本を参照し、序文はホガースが書いている。結論として、刊行は1896年ではなく1936年だと訂正し強調した。

平保興は文章を締めくくって大略次のようにいう。目録は編者が間違ふことがある。全面的に信用することはできない。研究者は必ず原作と照らし合わせなくてはならない。おっしゃるとおりです。まさか、平保興が間違いを正したはずの1936年そのものが誤っていようとは思ひもしない。

なるほど1936年3月出版なのか。第三版まで示している。実物を手にしたのだろうと受け止めた。

樽目録では記述が一致しない箇所には「ママ」を付加する。はじめに採用した刊年には「1896<sup>ママ</sup>」と符号をつけて残した。

1930年代の刊行物とわかった時点で樽目録からなぜ削除しなかったのか。そう質問する人がいるかもしれない。それについては、私なりの編集方針に従っている。

つまり、あとから小説ではないと判明した作品も消去しない。刊年などについて、拠った資料が記述を誤っていてもそのままにする。以前の記録を削除してしまうと、また最初から調べ直す必要がでてくるからだ。残しておいて、間違いだと注記する理由である。

たとえば、同じ『中国現代文学総書目』(892頁)に掲載されている林訳『葛利佛利葛』1897がある。作品題名が回文だ。これについて馬泰来が実物を探索しその記述間違いを訂正した<sup>\*31</sup>。書名からして誤っているという。正しくは『葛

利佛遊記』である。また1897年というのも間違い。1930、40年代の刊行だと指摘した。

馬泰来が誤記に気づいたのは、樽本編『清末民初小説年表』(1999)の記述が契機になった。年表と樽目録第2版は作品番号を連動させている。たどって行って誤りの原因が賈植芳らの目録であることを突きとめた。道具としての目録を利用すれば、そういう成果をあげることもできるという例だろう。

樽目録第4版から馬泰来の記述を取り入れて作品は今でも残したまま。林訳の版本だからそうする必要がある。

目録の編集方針についてもうひとつ書く。

単行本は重版もできるだけ収録する。雑誌連載は最初と最後のみを記載する。中断した号(期)がある、と具体的にご教示くださる方がいる。ほとんどが親切な人たちだ。ありがたいと感じる。ところが、事実を反映していない、不正確だと批判する人が、昔も今もごくまれに出現する。

重要なのは、ある作品についての連載情報を示すことだ。私は、連載の最初と最後を採録するという編集方針を定めた。目録凡例にそう説明している。目録は道具にすぎない。実物に到達するための手段だ。立論の根拠に目録を提示するばあいは、2次資料と知ったうえで慎重にあつかうのが常識である。いうまでもない。

専門家は最終的に自分の目で連載の実際を確認するだろう。そう私は期待している。可能なかぎり多くの手がかりを提供する。それが目録を編集する目的のひとつだ。矛盾した内容であろうとかまわぬ。馬泰来が実行した例のように、考える契機になるはずだ。連載に中断があると理解した人は、もう目的に十分到達している。それを目録の欠陥だといわれても、私には答えようがない。自己判断でご利用いただきたい。

さて、平保興は漢訳『父と子』の刊年を「正した」だけではない。前出のとおり、底本につ

いて「依據の藍本はThomas Seltzea<sup>ママ</sup>的訳本」だと説明した。同時に、ホガス序文、米川正夫日記にも言及する。これらは新しい情報だ、と当時の私には思われた。樽目録第4版にそれを吸収して注に追加した。平保興は知らなかったが、漢訳の底本問題が姿をあらわした瞬間だ。

本稿を執筆するにあたり、平保興が該論文のなかで掲げた先行文献を入手した。孫乃修『屠格涅夫与中国 二十世紀中外文学関係研究』(1988)\*32だ。



ツルゲーネフについての専著である。当然ながら中国における漢訳の歴史も書き込んでいる。藍文海訳『父与子』を紹介する部分が興味深い。孫乃修は、71頁において啓明書局初版が1939年3月出版であることをすでに明記しているではないか。さらには、次のようにも書いている。

「1939年3月上海啓明書局初版(属“世界文学名著”叢書); 1940年4月再版。據英訳本訳。有中訳者“小引”。(在原序中, 有這樣的字樣: “本書根據C. J. Hogarth英語本訳出”, 後面有標明是據湯姆斯·塞爾若(Thomas Seltzea<sup>ママ</sup>)英訳本訳, 難以判定究據何本。可能參照了這兩種本

子」407頁

孫乃修は、漢訳本「小引」に出てくる米川正夫日記本は無視した。理由は知らない。ホガス英訳と並置してセルツァー英訳を出している。そこから孫乃修は英訳そのものを見ていないことを私は理解した(後述)。藍文海漢訳にでてくる外国人の名前をくり返しているだけ。ただし、どちらか一方を選択してはいない。重要な箇所だ。

孫乃修は、1939年3月刊行だとはっきり書いている。その箇所をもう一度見る。そうすると、平保興が訂正して主張した1936年は、なんだろうか。平保興は、孫乃修が削除した米川日記本を明記する。漢訳原本を見ているのは確かだ。その奥付に1936年と印刷してあるのか。説明がないからはっきりしない。平保興は、賈植芳らの目録を否定するために、孫乃修の示した正しい刊年の1939年を無視し、間違った1936年を主張したことになる。不可思議な文章だ。

1936年刊行と平保興がいうのは、同じ啓明書局が出版した「世界文学名著」叢書の高爾基著、卞紀良訳『我的童年(My Childhood)』が関係するか。その初版は1936年5月だ。月違いでそれと混同したのだろうか。そうだとすると、誤りは誤りだろう。

平保興は、結局のところ刊年を1936年にしてしまった。そして現在、付建舟が孫乃修の示した1939年をふたたび無視して、平保興の1936年だけを取り上げて非難している。読者はすでにご賢察のことと思う。中国の学界では、批判するときだけ文献名を明示する慣習がある。あとで触れる。

問題の2 底本についても、孫乃修と平保興の説明には違いがある。すなわち、孫乃修は、ホガスとセルツァーを並置した。それに対して、平保興は、ホガスを序にまわし、セルツァー英訳本を前面に打ち出した。孫乃修の説明を大きく変更したのだ。そうした理由を平保興

は説明していない。

この平保興説が、のちの付建舟に影響を与えた。さらに、刊年のほかに、藍文海漢訳がもとづいた英訳本は何か、というもうひとつの問題が発生した。だが、それに気づいた人は、平保興本人を含めて誰もいなかった。

平保興の記述を手がかりに私が調査した。

樽目録第5版(2013)では「樽本注：TURGENEV著、CONSTANCE BLACK GARNETT訳、THOMAS SELTZEA序、“FATHERS AND SONS(CHILDREN)” 1917。米川正夫訳『父と子、処女地』世界文学全集第21巻、新潮社1927.7」と追加したのがそれだ。

米川正夫の日訳について出版社と刊年を補った。私がほどこした注で重要なのは、ガーネット英訳、セルツァー序と記した箇所である。こちらが事実にもとづいている。それまでの誤った説明を正した。強調しておく。セルツァーは序を書いたにすぎない。ここが底本問題の核心部分だ。

そこを把握していれば、研究者が底本をセルツァー英訳本と説明した瞬間に、それが虚偽だと判明する。そう書く専門家は、英訳本を見ていない。証拠となる実物を見ないで断言するのか、という不信につながる。

今見なおすと、調査したわりにはSELTZĚÄ<sup>マ</sup>(セルツァー。正しくはSELTZER)の綴りを間違えている。先行文献が誤っているのを踏襲した。SONSのかわりにCHILDRENとする版本もあるからカッコに入れた。また、英訳者のCONSTANCE BLACK GARNETTは、彼女の旧姓BLACKを混入させている。そういう表示が実在する。

孫乃修は、ガーネット英訳にもとづいて多くの漢訳がなされたことを詳述する(167-172頁)。だが、漢訳『父と子』について、ガーネットの名前はなぜか提起していない。平保興も同様だ。私は、おかしなことだと思った。さきほど述べたように、セルツァー英訳本では誤りだ。どう

いう理由があってその点を明らかにしないのか。奇妙なことが重複して出現している。

重要なのは、くり返すがガーネット英訳、セルツァー序という事実を指摘したことだ。従来の説明との違いに気がつく専門家は、目録の記述を鵜呑みにはせず自分で確認するだろう。そう考えていた。自分で調査したもの以外は、追跡検証ができるように拠った文献を示している。研究者が検索できるようにいくつかの手がかりを提供する方が大事だ。

以上がこれまでの経緯である。

今回、刊年について付建舟から別の見解が提出された。見解というより実物の書籍といったほうがいいか。「別の」と書いて「新しい」としないのは、27年前に発表された孫乃修の著書があるからだ。

付建舟本に掲載された藍文海訳『父と子』啓明書局版の写真をながめる。

奥付写真(315頁)には、「中華民國二十八年三月初版」、次行にも「中華民國二十八年三月出版」とある。付建舟が指摘するとおり1939年3月の刊行だ。同年同月の数字を重複させて「初版」と「出版」を示している。何か特別な意味があるのか。普通は1行にまとめるだろう。不自然に感じるが、そうになっている。理由はよくわからない。

さらに表示して、原題はFATHERS AND SONS、原著者：I. S. TURGENEVである。

写真で「原序」(316頁)と「小引」(317頁)を見る。縮小してあるが、かろうじて読むことができる。

「原序」の下にさらに小さく割り注で次のように書いてある。

本書根據C. J. Hogarthの英語本訳出、這篇訳序、就是Hogarth的序文。

ホガースHogarthの英訳本を底本にして漢訳しているのだった。「本書」とあるのだから誤解



のしようがない。英訳序文もホガースになる。藍文海はそう書いている。英訳底本はホガース本だ。

ところが、つづく「小引」にはそれとは異なる説明をする(傍線省略)。

本書是從湯姆斯・塞爾若(Thomas Seltze<sup>マ</sup>)  
の英訳年<sup>マ</sup>, 和參照米川正夫的日記本訳出。

Seltze<sup>マ</sup>の綴りは、以前に孫乃修と平保興がそのように書いていた。藍文海漢訳原文を誤りのままに引用したことがわかる。Seltzerを誤植した。付建舟もその誤植を引き継ぐ。また、原文の「英訳年<sup>マ</sup>」部分を「英訳本<sup>マ</sup>」(317頁)と勝手に訂正している。

さて、奇妙なことになっている。

ここではセルツァーの英訳が底本だという。「原序」で示したホガース英訳本はどうか。同一書で2種類の違う英訳本を掲げている。また、ホガースの序文はそれでいいのか。説明はなにもない。藍文海自身は理解しているのだろうか、他人にはなんのことだかわからない。

私が解説しよう。

藍文海は当然ながらセルツァーの名前が記載された英訳本を見ている。ただし、序文を書いたにすぎないセルツァーを英訳者として前面に押し出すという誤りを犯した。ここは私が目録の備考欄に注記したようにガーネット英訳本でなくてはならなかった。藍文海の勘違いだろう。それによって、セルツァー英訳と書いた孫乃修と平保興は、藍文海の記述を複写しているだけだとわかる。実物によって確認していないことが自動的に判明するのだ。ホガース序文についてはあとで述べる。

強調する必要があるのは、ホガースとセルツァーのふたりを英訳者とするこの記述に誰が注目したかということだ。孫乃修は理解していた。前に引用したとおり、ホガース英訳かセルツァー英訳かどちらか判断しがたい、と書いている

のが証拠だ。だが、平保興はそれを読んでいるにもかかわらずにも言っていない。それどころか彼はセルツァー英訳だけを取りだした。セルツァー英訳がすでに間違っている。ホガースを序文の作者にしてしまったのはもっとよくない。

ガーネットの名前は藍文海漢訳そのものに見えない。孫乃修も『父与子』についてはガーネットに言及していない。だから平保興の文章に出てくるはずもなかった。いろいろと不審箇所が多い平保興論文である。

では、付建舟はどう書いているのか。

つぎのように説明する。翻訳して引用したい。

(原序でホガース英訳本によって訳出したという箇所)ここには誤りがある。C. J. Hogarthは英語本の訳者ではなく、英語本序言の作者にすぎない。まさに藍文海のいうように「この訳序は、Hogarthの序文」である。317頁

そうなのかと思う。藍文海が底本としたのはホガース英訳本ではない。付建舟は、そう断言する。自信があるらしい。その書きようから英訳本を確認しているのだらうと推測する。それにしても根拠を示さない。英訳を見て確認したとか、普通は書くのではないか。あやしい、と感じる。

では、漢訳の底本となった英訳は誰のものなのか。ホガース以外に示された人名は何なのか。当然すぎる疑問が出てくる。セルツァーとの関係はどうなるのかということだ。

付建舟は藍文海の漢訳本を見ている。写真を掲げているのが証拠だ。現在では英訳本を見るのは、中国でもそれほど困難ではないだろうと思う。付建舟は、当然英訳本も入手しているに違いない。だから断言できるのだ。その彼がどんな解答を出しているのだろうか、と興味を覚えたのだった。

ところが、付建舟は英訳底本がなにかという問題に答えていない。首をかしげるとはこのことだ。一般に肩すかし、という。非難するだけで結論を出さないのはどういうことか。中途半端である。

あるいは、この問題についてはすでに解決している、と自分では考えているのだろう(後述)。しかも揺るぎない自信をもっている。ゆえに、1行書き足すだけで十分のはずだった。ところが、ここで英訳本について記述しない。付建舟には、底本問題が存在しているという意識そのものがないらしい。説明が不十分であることに気づけなかった。

つづいて妙な方向に筆が進んでいる。これも訳して引用する。

[樽氏目録871]にいう“CONSTANCE BLACK GARNETT訳”、“THOMAS SELTZEA序”とは何によったのかわからない。317-318頁

「樽氏目録」とは、樽目録第6版(2014)を指している。付建舟は、樽目録第6版を見て利用している。ウェブに手をひろげて情報を集めている人だと理解する。

中国では、多くが批判をする時だけ文献名を出す。すでに平保興で、またそれを訂正し非難した付建舟の例を見ている。

付建舟はここで、樽目録が提出した英訳について「何によったのかわからない(不知何據)」と否定した。何も知らない外国人が勝手なことをいっている。こういうばあい、中国人研究者は罵りの常套句を示すのが普通だ。それを使いたい、というのが本音だとわかる。漢訳に使用した底本について自分は知っている。付建舟が強い自信を持っているからこそ出てくる樽目録非難だ。この箇所を記憶にとどめておいてほしい。

付建舟は変なことを書いている。これが私の第一印象だった。どこがおかしい、と感じる。

その原因を考えていくうちに、いくつかの違和をおぼえた。

ひとつの違和感はこうだ。その文面を見ると、外国人は中国人の先行論文から引用するしか能力がない、と付建舟は考えているらしい。藍文海漢訳本、あるいは専門家の先行文献に出てこない“CONSTANCE BLACK GARNETT訳”“THOMAS SELTZEA序”をどこから引っばってきたのか、という意味なのだろう。これに対して私は「自分で調査した」と答えるほかない。それにしても、よりもよってセルツァー「序」を否定するとはどういうことだろうか。付建舟の記述に対する疑惑がうまれた。彼は、本当に英訳本を見ているのか。

もうひとつの違和感はこうだ。付建舟はセルツァー英訳が底本だとすでに別の場所で述べている。それが頭の中にあるから、説明が不十分になったものか。好意的に解釈すればそうなる。説明する。

該書の8頁に「清末民初俄国小説訳介路径綜考」を収録している(本稿に関連する部分は、同題(上)として『清末小説から』第115号2014.10.1に掲載)。藍文海漢訳の「小引」を示して前出と同じだ。湯姆斯・塞爾若(Thomas Seltzea)の英訳本にもとづき、米川正夫の日記本を参照して訳出した。この説明は、平保興が書いたのと同じだ。そうすると付建舟は、平保興が提示した刊年の1936年を否定しただけで、英訳底本については平と同じ見解だということになる。平保興が注に掲げた孫乃修の著書は知らないのか。知っていれば言及しなければならない。みつつ目の違和感だ。

付建舟にとっては、セルツァー英訳が動かない見解だとわかる。付建舟発言の自信はここから出てくる。だからこそ、それとは異なる樽目録第6版の注釈を否定し非難したのだった。

さらに、当時の漢訳者が日訳を参照する傾向について追加していう。

「たぶん英訳本が原著に忠実であり、日記本

は過度に日本化しているため、最大限度に原著に忠実で、うまく漢訳するために、そのような戦略をひきつづき採用したのであろう」8頁

この付建舟の説明は、藍文海漢訳に関しても適用できると考えている。付建舟は米川日訳本を手にして訳文を検討したのだらうと思う。「日訳本は過度に日本化している」と書くことができるのは見ているからに違いない。ところが、『父与子』について比較対照した、ということばはどこにもない。よっつ目の違和感だ。

藍文海漢訳本以外に、彼は手元にどういう資料を置いているのか不明である。いつつ目の違和感だといっている。

問題は、付建舟自身はセルツァー英訳が底本だと書いて、私が“CONSTANCE BLACK GARNETT 訳”、“THOMAS SELTZEA 序”と注をつけた根拠が不明だと非難する点だ。そこに自然と回帰していく。

セルツァー（実は前に示したGarnettガーネット）本を見ているのではないのか。見ていれば序文がセルツァーの作で、英訳はガーネットの手になることを知っていなければならない。ところが付建舟は的外れな非難を提出している。セルツァーを英訳者だと妄信しており、本当の英訳者ガーネットの名前を出さない。ここが不可解である。大きな違和感をおぼえる。

結局のところ、付建舟の説明では疑問が解決されない。

付建舟が藍文海漢訳の刊年について、先行諸論文に誤りがあると批判するのはかまわない。大いに主張して広めてほしい。ただし、1939年だと正しく書いていた孫乃修の著書を付建舟が無視するのはいかなるものか、と思う。その存在を知っていて無視するのは不適切だし不公平だ。知らないならば、調査と認識が不足している。

いう必要があるのは、非難するだけでは研究は進まない。これも事実だ。新しい発見をつけ加えてこそ価値が増す。ここでは、底本の特定

である。付建舟は意外に思うだろう。だが底本問題は、まだ完全には解決されていないのだ。

すでにホガースとセルツァーの名前が出ている。しかも、樽目録第6版にはガーネット英訳を追加し、セルツァー序だと一歩深めた注がある。孫乃修はその著書のなかでガーネットを詳しく紹介した。そこをたどっていけば、漢訳に使用した英訳底本を特定できる可能性が付建舟にはあった。なぜそれらの手がかりをまるで無用なもののように理由もなく切り捨てたのだらうか。付建舟がおかした致命的な誤りだ。

目録は信用できない、という先入観が付建舟にはあるのではないか。ましてや外国人が作成した目録など、先行目録を写しただけのデータメなものに決まっている。付建舟は、そう考えていそうだ。中国人研究者が目録を見る目は、だいたいその程度の認識だ。私はいままでさんざん見聞きしてきた。本稿でも指摘したことがある。自分がやっているから他人もそうに違いない。自分自身を他者に投影するという例だろう。樽目録が独自の工夫をこらしているという事実に気づこうとはしないのだ。

言い直そう。付建舟にとって、底本問題を解決できる機会が少なくとも2度あった。『清末小説から』第115号と『清末民初小説版本経眼録・俄国小説巻』の時である。樽目録第6版が端緒を提供していたのだが、見る目を持たなかった。検討する価値はないと思った。2度の機会をみすみす取り逃がしたといわざるをえない。残念に思う。

付建舟の文章を読んで納得のいかない点をいくつか書き出すと、その理由がわかってきた。

彼は、藍文海漢訳を原本で確認している。ここは間違いない。理解しがたいのは、セルツァー英訳が底本だと書いていっているところだ。なんども述べたように、ここはセルツァーではなくガーネット英訳でなければならない。私が目録の備考欄で明らかにした問題の核心部分である。これについて付建舟は「何によったのかわから



ない(不知何據)」と非難した。ここは付建舟が底本問題の核心部分について無知であることを示している。

彼は、英訳本で確認していないことを自分で知らずに白状した。私は、付建舟が英訳を見ていないとは思いませんでした。経眼録シリーズは、書籍の実物を掲げて疑義の出ないように書くところに特色がある。堅実で優れた研究者のひとりだと私は高く評価している。だから、底本についても同様に実物を見ていると考えていた。だが、私の判断間違いだったらしい。その認識のズレが違和を生じさせた原因だ。肝心の英訳そのもの、また日訳も見えていないにもかかわらず付建舟は断言した。だからこそ奇妙できてつたという。

はっきりいわなければ理解されない恐れがある。

付建舟は藍文海が示した英訳本そのものを探さなかった。平保興が強調した刊年は否定しながら、英文底本については平保興説を信じた。藍文海漢訳本に引用された外国人の名前を弄んで底本について発言しているだけだ。

資料を手元におかずに立論すれば、だいたいが失敗に終わる。漢訳『父与子』の英文底本に関する付建舟の説明がまさにそれだ。

結論としていえるのは、付建舟が正したのは刊年の1939年のみだ。それでも、孫乃修の指摘がすでにあることを知らない人は、すばらしい成果だと思うにちがいない。私がそうだった。もうひとつ、英訳底本について、付建舟は資料を探さず根拠のないことを述べた。

それにしても、中国人専門家3名が藍文海漢訳『父与子』の底本特定に失敗しているのはどうしたのか。孫乃修は除くとしても、平保興と付建舟は、英訳本を確認することなくセルツァー英訳本だと見当違いの説明をしているのだ。

藍文海の記述が不十分だった。それが誤解の原因かもしれない。しかし、実物で確認するのが研究者の仕事だろう。名指して批判文をわ

ざわざ1本書くときには、とりわけ注意深くあるべきだった。当然やるべき検討作業が行なわれていないとはどういうわけか。他人の文章を否定するために、自説に都合がいい部分だけを取りだして非難する。それ以外は先行文献を鵜呑みにする。自力で英文資料を探さないから本文を比較検討することもやっていない。私を驚かせる理由だ。

底本を特定する手順は、原文と訳本を比較対照するのが基本だ。これだけは昔も今も変わらない。

藍文海漢訳のばあいも、英訳と照らし合わせるだけでよい。

その藍文海漢訳の本文は、なぜだか付建舟は写真を掲載していない。材料は提供したが編集段階で削除されたのか。どのみち、重要資料が見える形に提出しなければ問題解決につながらないだろう。もっとも、今はウェブ上で一部を見ることができるが。



初版奥付部分(古書ネットより引用)

私は漢訳原本を購入した。こうして本稿を書いている。

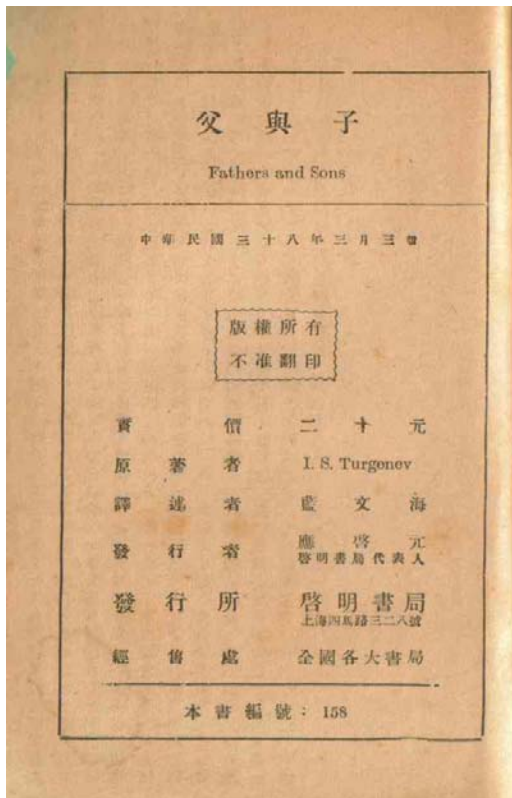
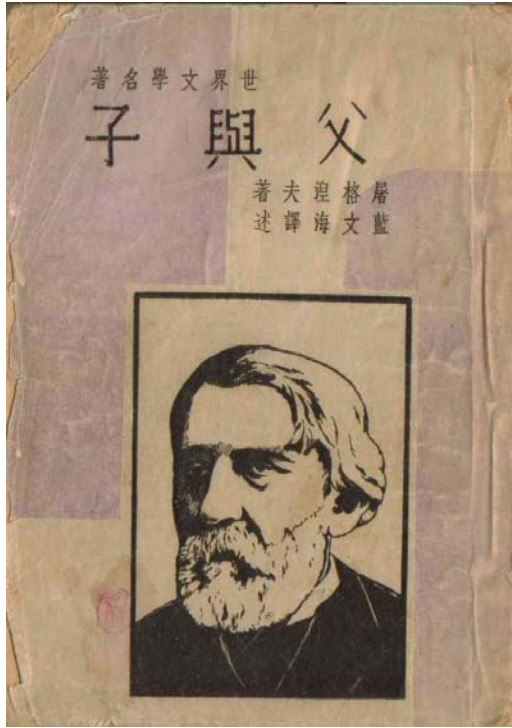
原序にあるホガースと小引に出てくるセルツァーが、底本特定の手がかりになる。

あらためて調べなおした。

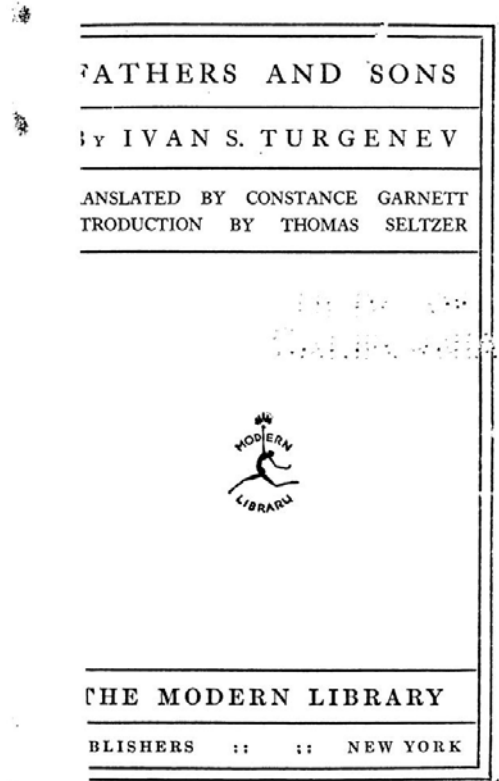
ふたりの人物がともにIVAN S. TURGENEVツルゲーネフ原作を英訳して同名のFATHERS AND SONSである。

英訳原題については、藍文海漢訳本の奥付に見えるとおりだ。

1949.3三版表紙、奥付



ガーネット英訳本



**FATHERS AND SONS**

I

"WELL, Piotr, not in sight yet?" was the question asked on May the 20th, 1859, by a gentleman of a little over forty, in a dusty coat and checked trousers, who came out without his hat on to the low steps of the posting station at S——. He was addressing his servant, a chubby young fellow, with whitish down on his chin, and little, lack-lustre eyes.

The servant, in whom everything—the turquoise ring in his ear, the streaky hair plastered with grease, and the civility of his movements—indicated a man of the new, improved generation, glanced with an air of indulgence along the road, and made answer:

"No, sir; not in sight."

"Not in sight?" repeated his master.

"No, sir," responded the man a second time.

His master sighed, and sat down on a little bench. We will introduce him to the reader while he sits, his feet tucked under him, gazing thoughtfully round.

His name was Nikolai Petrovitch Kirsanov. He had twelve miles from the posting station, a fine property of two hundred souls, or, as he expressed it—since he had arranged the division of his land with the peasants, and started a "farm"—of nearly five thousand acres. His father, a general in the army, who served in 1812, a coarse, half-edu-

1





の序文」である」というのも誤りである。

付建舟は、英訳文について絶対的な自信をもって樽目録の関係部分を批判した。だが、その根拠はといえば先行文献の受け売りにすぎず、しかも間違っていた。

小説冒頭部分について、英訳2種、日訳と藍文海の漢訳を照らし合わせる。

【ガーネット】“ Well, Piotr, not in sight yet? ” was the question asked on May the 20th, 1859, by a gentleman of a little over forty, in a dusty coat and checked trousers, who came out without his hat on to the low steps of the posting station at S . . . He was addressing his servant, a chubby young fellow, with whitish down on his chin, and little, lack-luster eyes. (「さて、ピョートル、まだ見えないか? 」という問いかけだった。1859年5月20日、40余りの紳士がホコリっぽい外套と格子縞のズボンで、帽子を被らず、Sというところの旅館の低い階段にでてきた。下男は、まるまるとした若者で、顎に白っぽい産毛をはやし、小さなどんよりした目をしていた)

【ホガース】“ Well, Peter? Cannot you see them yet? ” asked a *barin* of about forty who, hatless, and clad in a dusty jacket over a pair of tweed breeches, stepped on to the verandah of a posting-house on the 20th day of May, 1859. The person addressed was the *barin's* servant a round-cheeked young fellow with small, dull eyes and a chin adorned with a tuft of pale-coloured down. (注番号省略)

【米川】「どうだ、ピョートル? まだ見えぬかな? 」

一八五九年五月二十日、埃まみれの外套を着て格子縞の洋袴をはいた四十余りの紳士が、帽子も被らない素頭で、\*\*\*街道

に面した旅籠屋の低い玄関口へ出て来ながら、顎に白っぽい生毛をはやした、目のどんよりと小さい、頬骨の広い、若い下男にかう訊いた。(ルビ省略)

【藍文海】『喂，彼得，還是看不見麼? 』

一八五九年五月二十日、一位四十多歳の紳士、穿着一件佈滿了塵灰的外套，和一条格子呢的袴子，光着頭從某處的車站走出到石階上來，向一個圓面孔，下頰生有淡黃色的汗毛，和有一雙沒有神的小眼睛的年輕的僕人問道。(「さて、ピータ、まだ見えないか? 」/ 1859年5月20日、40余りの紳士が、ホコリまみれの外套を着て格子縞のズボンをはき、頭を覆わないまま、あるところの旅館から石段まで出てくると、まるい顔の、顎に薄黄の産毛をはやし、どんよりとした小さい目の若い下男に問うた)

ホガース英訳は、紳士にbarinなどという特別な単語を当てている。ロシア語原作から語順を自由に変更しているように見える。これが藍文海漢訳の底本になったとは考えにくい。

ただし、参照はしたかもしれないと思う。たとえば、下男の名前だ。ピョートルをガーネット英訳ではそのままPiotrとするが、ホガースはPeterとし、藍文海は彼得だからピーターである。参照した可能性があるという理由だ。日本語訳はつけなかった。

冒頭部分だけを見ると、付建舟が説明したような「日訳本は過度に日本化している」など、どこにもありはしない。漢訳の底本にはガーネット英訳を使用し、米川日訳をより強く参照した。ホガース英訳も参考にしたように思う。

藍文海訳『父与子』の英訳底本について、樽目録では以下のように説明することにした。

父与子

(俄)屠格涅夫著 藍文海訳述

上海・啓明書局1939.3 / 1941.7三版 /

1949.3三版 世界文学名著

IVAN S.TURGENEV原著[樽本]1949.3三版。藍文海の説明には誤りがあるので注意。漢訳に使用した英訳 *FATHERS AND SONS* は2種類ある。漢訳本文はCONSTANCE GARNETT 訳、THOMAS SELTZER 序、1917による。漢訳原序は、C. J. HOGARTH 英訳、J. M. DENT & SONS LTD, 1921による。ただし、原序の署名はE. R. (Ernest Rhys)。さらに参照したのは、米川正夫訳『父と子、処女地』世界文学全集第21巻、新潮社1927.7.15。刊年を1896、1936.3とするは誤り

罫

【附記】付建舟『清末民初小説版本経眼録・俄国小説巻』および同氏『清末民初小説版本経眼録・日語小説巻』についての疑問表は、2015.6.21付で清末小説研究会ホームページ <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto> に公開した。なお、本稿執筆後、次の論文を読んだ。張成軍「屠格涅夫小説在中国的經典化之路探析 “五四” 至建国前屠格涅夫小説在中国的傳播研究」(『広東開放大学学報』2015年第2期(第24巻総第110期) 2015.4.20)。藍文海漢訳本の出版社、刊年、底本について説明はまったくくない。

【注】

- 28) 付建舟『清末民初小説版本経眼録・俄国小説巻』北京・中国致公出版社2015.1)
- 29) 賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学総書目』福州・福建教育出版社1993.12
- 30) 平保興「關於《父与子》的出版年代」『図書館雑誌』2007年第8期(第26巻第8期) 2007.8.15
- 31) 馬泰来「無中生有的最早林訳《葛利佛利葛》」『清末小説から』第86号2007.7.1
- 32) 孫乃修『屠格涅夫与中国 二十世紀中外文学關係研究』上海・学林出版社出版、新華書店上海發行所發行1988.12 青年学者叢書
- 33) Terry Seymour, *A Printing History of Everyman's Library 1906-1982*. Author House, 2011 電字版

《領鈕》の原作

渡辺浩司

1

《小説大観》第七集(上海文明書局, 1916.10 - 上海書店・江蘇広陵古籍刻印社(1990.6)影印本を使用, 刊行年月は『清末民初小説目録 第6版』(樽本照雄編, 清末小説研究会, 2014.3.31, 同会ホームページ(HP)で公開)による)に《偵探小説 領鈕》なる短篇翻訳小説が掲載された。書名の下に“英國 Arthur Train 著 小青譯”とあり、原作者まではわかっていた。この度、原作が判明したので本稿で報告する。

原作は、『Monsieur Donaque』(『Everybody's Magazine』Vol.25-No.4(1911.10)掲載, 未見 『The Oamaru Mail』Vol.39-No.10957(1911.12.23)掲載及び『The San Francisco Call』Vol.113-No.57(1913.1.26)掲載を使用\*1)。

原作者 Arthur (Cheney) Train はアメリカの作家で、弁護士でもあった。1875年生、1945年没、40冊以上の著作がある。“Ephraim Tutt”を主人公とするシリーズで知られている。

訳者“小青”は、程小青のことで、原籍は安徽安慶、1893年に上海で生まれ、1976年に没した。作家・翻訳者・雑誌編集者として活躍し、中国探偵“霍桑”の生みの親である。

2





の助手となり、15歳で手品を披露するようになっていた。そして、17歳の時に、彼は消えた。それは秘密情報部の主任の命令によるもので、以後、Donaque は公職に身を投じ、私人であることを止めたのである。彼は灰色の目で、しっかりとした筋肉を持ち、平たい鼻で、幅広く口ひげをたくわえ、115ポンド(約52kg-渡辺注)で、赤毛だった。

彼は名の無い通りの番号の無い部屋に住んでいた。それは、Montesquieu 通りのある薬局の裏の秘密の入口から入る、秘密の建物の最上階にあった。薬剤師は彼の部下の1人で、守衛も兼ねていた。建物の下の階も Donaque の研究のために使われていた。彼は、Blatt という名で Curie 夫妻の所で学び、Lydenburg 教授という偽名を使い、ベルリン経由で夫妻と交流していた。彼は仕事に従事していない時には、勉強していた。学生の身なりをして、ドイツなまりのフランス語を話す彼が、フランス一恐れられている探偵だと思者は誰もいなかった。彼は、化学・病理学・細菌学・高等数学について常に研鑽を積んでいた。彼自身も研究室を持ち、オーストリア政府に特別な便宜を提供した見返りとして、Joachimsthal 鉱山のラジウムを1グレイン(約64.8mg-渡辺注)受け取っていた。

政府のために働いた20年の間に、彼は裕福になっていた。それは給与の年収4万フランではなく、仕事に伴う新発見の副産物によってであった。例えば、樽の中に少量の塩化ラジウムを入れたガラス管を浮かべることにより、ワインを人工的に熟成させることを発見し、パリ市内の工場で密かに生産を続けていた。

彼は助手の Dupre に次のように語ったことがあった(彼が話すのはめったにないことだった)、「現代の犯罪で最も危険なのは、科学上の発見を使った凶器によるものだ、国家としては人工的なものも含めた細菌による伝染が恐れられ、個人では電気を利用したものが恐れられている、稚拙でない犯罪とは未知のものを利用したもの

だ」。

彼の私用の部屋にはその個性を示すものは無かった。寝室には鉄枠のベッド、更衣室には書類が入った巨大な収納箱、書斎には、市内を見渡せる2つの窓の間に長い机があるだけだった。机上には電話が4台、それぞれ国防省、警察庁、建物の各部屋、パリの電話交換局につながっていた。部屋の隅には無線機があり、鉄道と航路をすべて示す地図、小火器の棚と小さなガラス瓶が整然と並ぶケースがあった。床は明るい赤の絨毯で覆われていた。ドアと窓枠は鋼鉄製で、スイッチが並ぶパネルがついていた。とても静かで、何の飾りも無い仕事場であった。

ある夜の10時頃、彼は薬局の裏口から入り、エレベーターに進んだ。自動のエレベーターが部屋まで上がると、彼は説明できないやり方でドアを開け、部屋に入った。Dupre が隣から現れ、帽子とコートを受け取った。Dupre は「警視總監が至急お会いしたいということで、5分前にこの手紙が届きました」等と言った。彼はタバコに火をつけ、無造作に封を切った。手紙は「内務省の特別事案で、貴君は、Neuilly-le-Real の Berlitz 男爵夫人の別荘での M. Faubert の死亡を調査するよう命じられた」と始まり、秘密情報部の主任の署名があった。彼は手紙を読むと、Dupre に、M. Faubert の死亡に関する切抜と、Louise Berlitz または Fraulein Schmidt に関する新聞記事を持ってくると明朝の Neuilly-le-Real 行きの準備を指示した。Dupre にも同道するよう言い、また警視總監には会えないのでお詫びを入れておくよう話した。そして彼は自分の体重をチェックし、本を読みながら眠った。

翌朝、彼は列車に乗り、二等車で大量の新聞を熱心に読んだ。隣には Dupre が座った。2人とも知られていないので、変装はしていなかった。通路を挟んだ反対側にはドイツ人の教授が座っていた。教授は、Donaque 側の棚の上の鞆にある「J. Katz, Leipsic」を見て、彼に話しか

けた。名刺を出し、「Heidelberg の Karl Schwintz 教授です」等と自己紹介し、ラジウムについて話し始めた。彼が興味を示したので、教授は喜んで話し続けた；ラジウムの発見は画期的なことで、そのエネルギーは計り知れない、1オンス(約28.3g-渡辺注)あれば、戦艦を時速40マイル(約64.6km-渡辺注)で永遠に動かせる、その中に永久運動の秘密がある、発する線も強力で、手にすれば火傷してしまう、癌も治療できる等々。Donaque は「すばらしい！」と言った。教授は更に、ラジウムを実験用に売ってもらおうとパリに来たが、入手できず失望して帰る所だ等と続けた。彼は「Heidelberg に戻ったら、この人を訪ねなさい、きっと力になってくれます」等と言い、名刺の裏に書いて教授に返し、下車した。

彼が調査を任された事件はフランス中の関心を巻き起こしていた。2,3年前、Fraulein Schmidt がパリに現れ、その機知と美で社交界の目を奪った。過去の噂のために彼女を締め出そうとする動きもあったが、彼女は自身でサロンを催し、当時の著名な男性たちがそこに群がっていた。やがて彼女は、裕福な銀行家の Valentin と結婚した。幸せそうだったが、夫は突然、謎の病気で死亡した。服喪の後、Madame Valentin は社交界に復帰した。彼女の歓待は社会の話題になり、食事はパリの食通を驚かせ、散財の気前よさは大変な騒ぎを起こすほどだった。彼女は有名になり、大統領でさえも彼女のファンだとささやかれた。

その後、彼女は全く突然に再婚した。相手は Berlitz 男爵、ユダヤ系の紳士で、銅の株式で裕福になった。男爵は彼女のために美しい古別荘を購入した。そして、そこで男爵は死亡した。伝えられる所では、麻痺によるもので、偶然の一致としか考えられなかった。彼女は Berlitz 男爵夫人として、パリに戻って来たが、社交界の彼女への扱いは変わった。彼女の美しさや歓待ぶりは以前と同じだったが、男たちは女主人

として彼女を見た。彼女は以前の人気を取り戻そうとしたのか、ますます浪費するようになり、Berlitz の豊かな富も持ちこたえられないように思えた。そこに、財務大臣が現れ、経営に関わるようになった。

M. Faubert はとても人気があった。一般人から左翼の演説家として名を揚げたが、当時、必要とされていた、どこにも属さない自らの党を立ち上げた。順調にことが進み、財務のトップになった。大臣は陽気な中年男で、自らの政策に干渉されるのを嫌がり、会議ではいつも中立の立場だった。Berlitz 未亡人に対する彼のやさしさは噂話の種になり、2人はいつでも共に行動するようになった。2人は月曜に競馬場で、火曜に Hotel Continental で夕食を取っているのを見られていた。そして、金曜の朝、M. Faubert が前日の晩に Neuilly-le-Real の彼女の別荘で麻痺により突然、死亡したというニュースで、パリは目を覚ました。金曜の朝、Donaque はロンドンから呼び戻され、今、土曜の昼である。彼は仮の検死報告も読んだが、不十分なものだった。M. Faubert は木曜の朝、ベッドで死亡しているのを、起こしに来た従者によって発見された。前日の夕食時には、とても元気で上機嫌だった。従者は Bertrand といい、第一証人となった。その他の証人は、執事の Pierre Fragonard、治安官で検死の前に遺体を預かった Jules Tonnetti、女中の Marie Redon、医者で、遺体には暴力の跡は無く、麻痺による突然死であったと証言した Edmond Pepin がいた。

Neuilly-le-Real に着くと、彼はすぐに宿に入り、地元の警察の責任者を呼び、検死について聞いた。新情報は、遺体が埋葬のためすでにパリに送られたことくらいであった。彼は助手に指示を出し、別荘の位置を確かめるため出かけた。村の南3マイルの所に、道と平行して壁が立っており、少し進むと、川上の小高い所のカシの木立の向こうに塔が見えた。やがて開けた所を横切り、巨大なカシの木がある丘の上に着

いた。彼はその木に上り、そこから4分の1マイルもない別荘を見下ろした。人らしき姿が見えたので、彼はポケットから双眼鏡を取り出し、焦点を合わせた。夏服を着た女性が歩き回るのが見え、やがて男が現れ、彼女に合図をし、2人とも屋敷に入るのが見えた。警察の話では客はいないはずなのに、明らかに1人いたのである。彼は村へ戻った。

この事件では2人が証人として呼ばれていなかった、Berlitz 男爵夫人と葬儀屋である。夫人にはいずれ会うことになるので、彼は後者に会いたいと考えた。彼は、葬儀屋が教会の世話係もしており、銀髪のおしゃべりな老紳士であることを聞き出し、その男がベンチでパイプを吸っているのを見つけた。彼が丁寧に話しかけると、男は喜んで彼に席を勧めた。話はすぐに M.Faubert の死亡に移り、男は死を知った時の様子を話した；朝、Bertrand がやって来て「M. Faubert が亡くなった、彼を安置するので来てくれ」と言い、死因を尋ねると、「何か突然のショックによるものだ、大変に悲しい」等と答えた、途中、私たちが村長に知らせると、村長は Jules Tonnetti をやって、検死官が来るまで待つよう言った、別荘に入り、巨大な寝室のベッドに M. Faubert が頭を少し左に傾かせて横たわっていた、近寄ってよく見ると、遺体は華やかに着飾っていたが、カラーの後ろのボタンが無かった、辺りを捜したが見つからず、私は自分の安物のボタンをはずし、着けてあげた、あの偉大な閣僚が年寄りの教会の世話係のカラーボタンを着けて埋葬されるのだから、結局はすべての人は平等に創られている等々。

彼が別荘の玄関に来た時には、日は大きく西に傾いていた。彼の希望に、従僕は生来の横柄さを隠そうとしながら「奥様はどなたにもお会いになりません」と対応した。彼は紙に何か書き、夫人に渡すよう命じた。ほどなく彼は中に招かれた。豪華な装飾の屋敷内を進むと、豊かな黄色い髪の夫人が安楽椅子に座っているのが

見えた。取り次ぎ無しに入室すると、夫人は濃い灰色の目を上げ、鋭い視線を向けた、その表情は神経質と恐怖に苦しんでいた。夫人は冷たく「貴方の訪問を受ける理由は何でしょうか」等と尋ねた。彼は近づき、丁寧に辞儀し、「政府は M. Faubert の死に深く関心を持っています」等と言った。会話の中で、彼が、以前に夫人が Fraulein Lena Schmidt だった頃、会ったことがある等と言うと、夫人はわずかに青ざめた。更に彼は秘密情報部に勤めていること等を話し、M. Faubert の死について調査するため、自ら別荘に滞在することを申し出た。夫人は許可し、更に望みを尋ねると、彼は「今から2時間、M. Faubert が亡くなる直前の通りに過ごすように」と要請した。夫人は謎の微笑を浮かべ許可し、使用人に伝え、Bertrand を呼んだ。そして、Bertrand に、彼を M. Faubert の寝室に案内し、お手伝いするよう言った。最後に、彼が夫人に他に客はいるかどうかを尋ねた所、夫人はいないと答えた。Bertrand に案内され、彼は巨大な寝室に入った。Bertrand は軽いドイツなまりで、従僕らしくなく、よく日に焼けていた。彼が「フランス人ですか」と尋ねると、Bertrand は「はい、Alsace です」と答えた。Bertrand が靴を取って来るため退室すると、彼は3分間で、ベッド・壁等を綿密に調べ、椅子に座って本を読んだ。戻って来た Bertrand は、思った通り、恐怖と敵意の表情で神経質そうな様子だった。彼は Bertrand に靴の鍵を渡した。Bertrand は入浴するかどうか尋ね、彼は入ると答えた。そして Bertrand は浴室の準備をし、靴の中の服をベッドに並べた。その時、カラーの後ろにボタンを留めた。彼はゆっくり立ち上がり、部屋のドアを閉めすばやく鍵をかけた。ベッドに近づきながら、「見ていたが、君は私にカラーボタンをくれるんだ」等と言うと、Bertrand は彼の目を避け、口ごもりながら「貴方のカラーボタンが無かったので、非礼を顧みず、私のを留めました」等と言った。「ご親切に感謝する」

等と答えて、彼はその銀製に見えるボタンを調べた。「私は銀よりも真鍮のが好きなので、交換してくれるか」等と言うと、Bertrand は青ざめ、息苦しそうに「承知しました、部屋から代わりをお持ちします」等と言った。彼は「君は自分のにはこれを留めたくないのかな、M. Faubert が亡くなった夜に留めていたのと似ているのかな」等とからかい気味に言い、ボタンをカラーからはずし、Bertrand の目の前に近づけた。Bertrand は飛びのいて、彼の指からボタンを叩き落とし、悪態をつきながら、ドアに直進したが、鍵がかかっていた。Bertrand が怒り野獣のような表情で彼を見たので、なだめるように「暴力はいけない、おとなしく私と一緒にいきますか」等と言った。答えの代わりに、Bertrand は電灯を消した。室内は真っ暗で、ただ隅のテーブルの下に小さな光が見えた。彼は Bertrand がそれを取りに行くと考えたので、その息づかいと絨毯の音の後を追った。Bertrand がボタンを拾おうとした所に、飛びかかり、のどをつかんだが、頭を何かにぶつけて、一瞬気を失いかけた。Bertrand にボタンを拾われたので、彼は脱出を阻止しようと窓の方へ向かった。音がしないので、暗闇をよく見た所、かすかな光が動くのが見え、ラジウムの光が Bertrand の服を通してののがわかった。彼は突進して、Bertrand を押さえつけ、その鼻と口に小さな球を押し付け、それを割ると、刺激臭がし、Bertrand は抵抗無く倒れ込んだ。彼はさるぐつわをかませ、手首と足首に手錠をはめると、そのポケットからボタンと鉛の箱を取り出し、ボタンを箱に収めた。Bertrand をベッドの脚に縛り付けた後、彼は入浴し、晚餐用に正装し、荷物を片付け、外から部屋に鍵をかけた。

食堂で、夫人は彼に向かいに着席するよう言い、「Bertrand のサービスはきっとお気に召したことでしょう」等と話した。彼は「彼はそれ以上でした」等と答えた。豪華な晚餐が始まり、彼は改めて夫人の美しさと時折見せる神経質さ

に感嘆した。夫人は彼にどんな変化が表れるのかを待ち望んでいた。その地方や別荘のことを明るく話し、M. Faubert のことも気宇壮大だと賞賛した。食後、夫人はタバコに火をつけ、彼を挑戦的な目で見つめた。夫人が「M. Faubert の最後の晩のように過ごすことにご満足ですか」等と尋ねると、彼は「美しい女主人とのすばらしい晩餐の後では、このまま彼女の友人として生き続けるか、この思い出を汚さぬよう死んでしまうか、どちらを選ぶか考えるでしょう」等と答えた。夫人は笑い「いつもそんな風ですか」等と言い、「食べて、飲んで、楽しんで下さい、明日、貴方は死ぬのだから」等とも言った。彼は「そんなに早くですか」と微笑み、夫人は目を半分閉じて「恐らく」と言い、「そうでなければ、私たちは友達でいられるでしょう」等と加えた。彼はタバコを置くと、不意に「ラジウムについてのご研究は続けていますか」等と言い、「貴重な資源をかなりの量、お求めになるだけの財力はお持ちでしたね」等と尋ねた。質問の意図を聞き返した夫人に、彼は、ラジウムがどこにどれだけあるかを知ることが自分の仕事に必要な等と答え、夫人がいつ、どこで、どれだけラジウムを入手したかを述べ、最後に、オーストリア政府から1グレイン入手した際には、M. Faubert の援助があった等と指摘した。タバコを落とし、青ざめる夫人に対して、彼は、ラジウムの人体への恐ろしい影響について話し、カラーボタンのような物に微量のラジウムを入れて脊髄の近くに留めさせれば、簡単に命を奪える等と言った。そして鉛の箱のカラーボタンを示すと、夫人は跳び上がり、「Bertrand」と叫んだ。彼は、Bertrand は現れない等と話し、「貴女にはしばらくフランス政府のゲストになっていただきます、明朝の新聞は財務省の会計内に不足が500万フランあることを報じるでしょう、奥様、参りましょうか」等と言った。夫人が「どこへ」と尋ねると、Donaque は「パリです」と答えた。

ラジウムに関する知識が不正確であるが、ラジウムを利用した殺人は現代でも行われているようなので、時代を先取りした作品と言えるかも知れない。

3

翻訳について述べる。他に訳されていた場合の原作探求の手掛りになると思うので、主な固有名詞等の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Rene Donaque	藍尼 杜那克
Dupre	特潑里
(Fraulein)Schmidt	(弗洛菱)斯克美
Berlitz	苞麗斯
M.Faubert	愛姆 番勃忒
Bertrand	培脱朗
Neuilly-le-Real	耐來耳
radium	蘭特姆

書名について、「Monsieur Donaque」を、“領鈕”(カラーボタン)としている。“偵探小説”ならば、最後まで隠しておきたい犯行の鍵をいきなり明かしてしまっている\*2。

内容については、省略と改訳が多いことが言える。原作冒頭の Donaque の紹介がほとんど省略され、また、彼が Neuilly-le-Real に行く列車内でのドイツ人教授との会話はすべて省略されている。前者は一部が、後者はすべてが、Donaque がラジウムに詳しいことを示す記述になるので、少なくともその部分は省略すべきではないと思う。

事件を依頼される日の冒頭部分を挙げる。

On the evening of which we write, Donaque, at about ten o'clock, entered the apothecary's and passed without stopping through a small door in the extreme rear into a tiny electric elevator. This started of its own accord and automatically came to a

gentle stop when it had reached the level of his apartments, the door of which was opened by some process inexplicable to the ordinary observer, and Donaque was in his home, fortress, office - what you will. A cornice-light filled the room with a gentle glow, while a green-shaded lamp on the table served for reading purposes.

Dupre came from an adjoining room and relieved his master of his hat and Inverness coat.

(これから述べようとするある夜、Donaque は、10時頃に薬局に入って行き、そのまま一番奥の小さなドアを通り、小さな電動エレベーターに乗った。それはひとりでに動き出し、彼の部屋の階に着くと、自動的にゆっくり止まった。部屋のドアは普通の人が見ただけではわからない方法で開けられ、Donaque は彼の部屋、要塞、事務所 - 好きなふう呼んで下さい - に入った。天井の明かりはやさしい白熱光で部屋を包み、一方、机上の緑色の傘のランプは読書に適した光を提供した。

Dupre が隣の部屋から現れ、くつろげるよう主人の帽子とコートを預かった。)

當吾書開紋之始。時方深秋。夕陽既西。暝色漸薄。巴黎全城之禮拜寺。晚鐘乃續續而鳴。鐘聲悠揚。爲微風所盪。紆迴空際。初未遠颺。一若與巴黎有故人之情。戀戀不忍遽別。於時。杜那克挾一柔皮之行囊。忽忽逕叩藥肆之門。襟間飛塵宵集。若新從遠道歸者。既入。經一甬道。曲折達昇降機所在。乘之而上。機爲杜那克自製。雖構造不中程式。顧亦頗適用。侍者聞機聲。立關扉延主人入。杜那克去冠及行囊授之。室中懸瓦斯燈數事。蓋以綠磁之罩。而寫字桌上之油燈。亦以綠綾幕之。光至幽澹。坐甫定。特潑里翩然入。(1頁, 句点は原文のまま, 以下同)

(私の本に記された最初は、晩秋の頃だった。夕陽が西に沈みつつあり、夕方の明るさが薄らいでいた。パリ中の教会が鐘を鳴らし、その音の広がりはその風に揺らされ、空へ上がり、遠くには響かなかった。その様子は、パリを惜しんで離れるに忍びないかのような感じだった。その時、杜那克は皮の旅行鞆を持ち、すばやく進んで薬屋のドアを叩いた。襟にはほこりがたまり、遠路はるばる帰った人のような感じだった。中に入ると、廊下をあちこち曲がりながら進み、エレベーターの所に着いた。それに乗り上げて行った。機械は杜那克の自作で、構造は規格外だが、使い勝手はとてもよかった。使用人は機械の音を聞くと、すぐにドアを開けて主人を迎え入れた。杜那克は帽子と鞆を預けた。室内には緑の傘のガス灯が数個かかり、机上のオイルランプにも緑の布の幕がかかって、静かに照らしていた。腰を下ろすと、特瀨里がさっと入って来た。)

中国語訳は加筆と改訳のために、物語の流れ以外は全く変わってしまっている。次に、最後の Donaque と男爵夫人の食事の後の場面を挙げる。

For a moment the detective made no reply. Then he laid down his cigarette and leaned forward. "Madame," said he abruptly, "have you continued your investigations into the mysteries of radium?"

"I?" she cried. "Radium?"

"Yes, Madame," returned Donaque. "I had always supposed that you had the great fortune to possess a considerable quantity of that invaluable element. Am I not correct?"

The eyes of the Baroness narrowed to mere slits, and involuntarily she placed her

left hand upon her breast. "Why do you ask me that?" she demanded.

"Because," returned Donaque, "I have found it important in my profession to acquaint myself with some accuracy as to the whereabouts of such amounts of the element as may be available. For instance, I note that as Lena Schmidt you twice purchased during the year 1899 as much as a quarter grain through Dublatz of Leipsic. That is no inconsiderable quantity. A few years later my records show that half a grain came into your possession through your acquaintance with Dr.Giesel. Within eighteen months I am informed you secured an entire grain from the Austrian Government by means of the intermediation of the Bureau of Foreign Affairs and the influence of no less a person than M.Faubert himself."

The cigarette dropped from the delicate fingers of the Baroness Berlitz, and a dusky pallor spread across her face. The gleam in her eyes changed from that of the tigress to that of a frightened fox. But Donaque appeared to be deep in his own thoughts.

"You and I know the wonderful qualities of this mysterious element; yet it is strange how little the world at large is acquainted with its almost supernatural powers - its terrible effect upon the human body, for example, when placed in juxtaposition with a vital part. I have often wondered at the infrequency with which it has been used as a means to take human life, for it leaves no trace behind it. Only one case I know - that of a dentist who filled his victim's tooth with a composition containing radium bromide. The man died in horrible agony within a few days - yet no doctor suspected the cause of



the frightful abscess which formed upon his jaw.”

Donaque stopped and shot a glance across the table at the Baroness, who sat rigid, her teeth fastened in her lower lip, her bosom heaving rapidly.

“ How easy it would be, ” continued Donaque relentlessly, “ to cause death by inducing a person to wear near his spinal cord some little object containing a few grains of radium - say a collar button ? ”

The Baroness uttered a gasping cry.

“ Like this, ” he added, taking from his pocket the leaden case and laying it open upon the table.

The woman sprang to her feet, overturning several of the glasses and gazing wildly at Donaque.

(少しの間、探偵は答えなかった。そして彼はタバコを置き、体を前に傾けた。「奥様」彼は不意に言った「貴女はラジウムの謎についての研究を続けていますか？」

「私？」彼女は大きな声を出した。「ラジウム？」

「はい、奥様」Donaque は答えた。「貴女は巨万の富で、その稀少な元素を相当量保有することになったと思います。正しいでしょうか？」

男爵夫人の目は線のように細くなり、思わず左手を胸の上に置いた。「なぜ貴方はそんなことを尋ねるのですか？」彼女は聞いた。

「なぜなら、」Donaque は答えた、「私の職業では、利用可能な量のその元素がどこにあるかを、ある程度正確に把握しておくことが重要だとみているからです。例えば、貴女が Lena Schmidt の名で1899年に2回、4分の1グレインの量を Leipsic の Dublatz から購入したことを知っています。それはも

うわずかという量ではありません。その数年後、Giesel 博士と知り合い、それにより2分の1グレインが貴女の所有に帰したことを記録しています。18か月以内に貴女がオーストリア政府から1グレインまるまる入手したと知らされました、それは外事局の仲介によるもので、M.Faubert の力だったとしか思われません。」

Berlitz 男爵夫人の華奢な指からタバコが落ち、その顔は暗く、青白く変わっていった。目の光は虎からびくびくする狐のようになった。しかし Donaque の方は深く考えているふうだった。

「貴女と私はこの謎の元素が持つすぐれた特質を知っています；だが、この自然を超越するほどの力についてご存知の人が世界中にほとんどいないというのが不思議です - その力とは、人体に及ぼす効能のことで、例えば、人の生命維持に直結する部分の近くに置かれた時に現れます。命を奪う手段として使われることがめったに無いのを不思議に思うことがよくあります、それは後に痕跡を残さないからです。私の知る唯一の事件は - ある歯科医の件で、犠牲者の歯に臭化ラジウムを含んだ混ぜ物を埋め込んだのです。犠牲者は数日で悲惨な激痛に見まわられて亡くなりました - だが、犠牲者のあごにできたひどい腫みについて医師が疑われることはありませんでした。」

Donaque は話を止め、テーブルの向こうの男爵夫人をちらりと見た、彼女は座ったまま硬直し、下唇をぎゅっと噛みしめ、動悸が激しくなっていた。

「非常に簡単でしょう」Donaque は冷酷に続けた「人に服を着させることによって、その人を死なせることです、脊髄に当たる部分に2, 3グレインのラジウムを入れたものを付けておく - 例えば、カラーボタンですわね？」

男爵夫人はあえぐような叫び声を発した。

「このようなものです」彼は加えて、ポケットから鉛の箱を取り出し、卓上でそれを開けた。

彼女はとび上がり、グラス等をひっくり返した、そして Donaque を厳しくにらみつけた。) )

杜那克不答。駢兩指彈去菸上灰燼。既忽突然詢曰：“夫人於蘭特姆之質性。亦頗研究否。”夫人皇然曰：“蘭特姆耶……”杜那克急應曰：“然。吾聞夫人富金。故能多得此物。信耶。”夫人雙眉頓蹙。曲其左腕置胸臆間。低聲曰：“君何爲詢吾以此。”杜那克曰：“吾好化學。於此物曾加剖驗。然值昂而不易得。惟醫士奧司劈克嘗以之鬻人。吾聞夫人亦累嚮彼人購得之。”夫人面容驟變。手中捲菸不期而墜。眸子@{目+冂}@{目+冂}露異光。如受獵之狐。杜那克復曰：“顧世人徒知蘭特姆具醉麻之作用。初不知能致人之命。且爲力至神。死後絕無纖毫之毒證。以留間隙。昔有牙醫某。以蘭特姆嵌置牙心中。陷其仇家。越一晝夜而仇家歿。衆疑之。令醫士反覆剖驗。至十餘次。卒未獲受毒之迹兆。獄不得直。及後。牙醫於醉中自洩。始置法焉。夫人多經驗。此理必熟審也。”言至此。覺夫人嚙齒作聲。酥胸間。吐噏之勢。漸次加促。因續曰：“設以之琢成領鈕。加於脊梁間。則傳染尤易。取効亦速。”夫人力搓兩手。直欲失聲而嘯。杜那克隨出鉛盒之鈕。置桌上曰：“非類此耶。”夫人立躍而起。桌幾爲覆。(10-11頁、コロン・引用符は補った)

(杜那克は答えずに、タバコの灰を兩指で弾き落とした。そして突然尋ねた「奥様はラジウム(蘭特姆)の特質についてよく研究していますか？」夫人は不安そうに「ラジウムですか……」杜那克はすぐに答えて「はい。奥様は裕福で、その物質をたくさ

ん入手できたと聞いていますが、確かでしょうか？」夫人は眉をしかめ、左手を曲げ胸の前に置き、小声で「貴方はどうしてそんなことを尋ねるのですか？」杜那克は「私は化学が好きで、その物質について分析したことがあります。ただ高価で入手困難です。医師の奥司劈克だけが以前にそれを売っていました。奥様もしばしば彼から購入していたそうですね。」夫人の顔色は突然変わり、持っていたタバコを不意に落とした。目からは捕まった狐のような光を發した。杜那克はまた「世間の人にはラジウムに麻酔の作用があるのを知っているだけで、人の命を奪うことができるのを全くわかっていません。更にその威力は超絶なのに、死後には全く痕跡を残しません。以前、ある歯科医が隙間を埋めるという理由で、ラジウムを歯の中に埋め込み、仇敵を陥れようとした。一昼夜過ぎると仇敵が死んだので、周りの者は疑い、医師に繰り返し調査させました。十数回調べましたが、結局、毒物の痕跡は得られず、犯罪を立証することはできませんでした。後に、歯科医が酔った時に自ら漏らしたため、やっと捕まったのです。奥様は研究を重ねているので、今の話は詳しくご存知でしょう。」ここまで話すと、夫人は歯をかちかち鳴らし、ぐったりしていたが呼吸だけは次第に速さを増したように思われた。そこで続いて「もしそれをカラーボタンにはめ込んで、背骨の所に付ければ、更に伝わりやすくなり、効果が現れるのも速くなります。」夫人は両手をこすり合わせ、そのまま声を失い、うなった。杜那克は鉛の箱のカラーボタンを取り出し、卓上に置き「こういうものではありませんか？」夫人はとび上がり、テーブルはひっくり返りそうになった。)

やはり物語の流れは変えていないが、省略が多く、細かな改訳も多く見られる。

4

ラジウムを扱った短篇探偵小説は、Jacques Futrelle 『The Lost Radium』(1906?)や Edith MacVane 『The Radium Robbers』(1914)がある。ただ、両者とも盗難事件であり、ラジウムの放射線を利用した殺人事件を描く本原作は珍しいと思う。そういう題材の珍しさもあってか、雑誌掲載後、新聞2紙に転載された。それだけ読む価値を有すると認められていたのである。このような作品を選択・翻訳した程小青は、翻訳の出来はいいとは言えないが、やはり探偵小説に対してすぐれたセンスを持っていたと言えよう。

罫

【注】

- 1) 『The Oamaru Mail』は1876年創刊のニュージーランドの新聞。「Papers Past(National Library of New Zealand)」HP 公開版を使用。『The San Francisco Call』はアメリカの新聞、1856年創刊の『Daily Morning Call』がその前身で、『The Morning Call』という名称変更を経て、1895年から『The San Francisco Call』となった。「California Digital Newspaper Collection」HP 公開版を使用。
- 2) 余談であるが、『The San Francisco Call』掲載の原作は2版に渡っている。その第1版の右下に「How easy to cause death with a radium collar button.」(ラジウムのカラーボタンで死をもたらすことは至極簡単である)という言葉と共に、Donaque が光るカラーボタンを見つめる絵が掲載されている。本文の方はまだ捜査の途中なので、これも犯行の鍵を完全に明かしており、読者を興ざめさせる。

【参考文献・ホームページ(HP)】

- 裴效維「程小青」、梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》中華書局、1997.2
- 裴效維「程小青」、馬良春・李福田総主編《中国文学大辞典》第8巻、天津人民、1991.10

- David Schmid 「TRAIN, Arthur」, General Editors John A. Garraty, Mark C.Carnes 『American National Biography』 Vol.21, Oxford University Press, 1999
- California Digital Newspaper Collection  
<http://cdnc.ucr.edu/cgi-bin/cdnc> (2015.7.9確認)
- William G.Contento and Phil Stephensen-Payne 編「The FictionMags Index」  
<http://www.philsp.com/homeville/fimi/0start.htm> (2015.7.9確認)
- Papers Past(National Library of New Zealand)  
<http://paperspast.natlib.govt.nz/cgi-bin/paperspast> (2015.7.9確認)
- 東照(あずま・てる)管理 HP「書肆翻訳・七里のブーツ」  
<http://longuemare.goزارu.jp/index.html> (2015.7.9確認)

【追記：ラジウムを扱った短篇探偵小説について、Arthur B. Reeve 『(The) Radium Robber』(1914)もあった。“Craig Kennedy”シリーズの一作である。タイトル通り、ラジウムの盗難事件を扱うが、更に犯人がラジウムを使って、2人の人の殺害を謀る。そのうちの1人に対する方法が、面白いことに、カラーボタンにラジウムを付着する方法を採っている。ひょっとしたら、本作『Monsieur Donaque』の影響を受けたのかも知れない。】

次号の公開は2016年1月1日を予定しています  
清末小説研究会 <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

漢訳『奇獄』の謎 1

問題提起篇

沢本香子

漢訳短篇集『奇獄』は「一」と「二」の2冊がある。本稿においては、従来の認識をくつがえす問題が存在することを指摘する。

『奇獄』について現在まで判明していることは、およそ以下のとおりだ。

阿英の記述

ここでも阿英目録\*1が問題発生の原因になっている。のちの研究者は、阿英の記述を丸呑みするだけ。『奇獄』の実物を見た専門家も、基本的には阿英が設定したワクから出てはいない。

阿英の説明を示す。

[阿英124] 奇獄 美 麦枯准<sup>ママ</sup>[滑]爾特<sup>ママ</sup>著。第一冊、林蓋天<sup>ママ</sup>訳、光緒三十一年(一九〇五)刊。第二冊、華才子<sup>ママ</sup>訳、光緒三十二年(一九〇六)刊。小説林社版。(注:傍線のズレはそのまま)

第一冊: 假死偽葬 郵書之奇禍 金剛石之頸鏈<sup>ママ</sup>[鏈] 籤票 金網 万金之革帶 [袋]

第二冊: 西門特被殺案<sup>ママ</sup> 假死竊産案 銀柄斧案 虚無党之秘密会<sup>ママ</sup>

ママと注記したのは阿英の記述間違い、あるいは誤植、または疑問が生じている箇所だ。今

見ることのできる資料によって正しい漢字を [ ] 内に補った。見た目がごちゃごちゃした記述で申し訳ない。また、疑問点のすべてを正しているわけではないので注意されたい。

上記のとおりアメリカ人の原作を中国人ふたりがそれぞれ漢訳したとわかる。第1冊と第2冊にわけ、実際に収録された作品の題名を明記している。それができるのは、阿英が実物で確認しているからだ。阿英目録の強みは、そこにある。ただし、別の資料と照らし合わせると一部漢字に異同があることに気づく。おいおい述べる。

阿英の記述を見れば、2冊ともに「美 麦枯准爾特」と書いてあることになる。ここを示されると、誰でもそう思う。あとで問題になるところだ。

中村忠行の指摘

『奇獄』の原作について指摘した人は、私の知るかぎり中村忠行が最初だ。彼以外に言及した研究者は、日本にも、ましてや「文化大革命」が進行中の中国にもいなかった。それ以後も同じ。

中村忠行「晚清に於ける虚無党小説」(『天理大学学報』第85輯1973.3.21)において次のようにいう。先駆的論文でもあるから細かくなるが引用する。利用できる資料に制約がありながら、どこまで追究できるかを示した好例だと考えるからだ。割り注は開いた。

光緒卅二年(一九〇六年・明治卅九年)

虚無党之秘密会 華才子訳 小説林社刊  
美・麦枯准爾特の『奇獄』第二冊の内。  
第一冊は林蓋天訳で「假死偽葬」・「郵書之奇禍」・「金剛石之頸鏈<sup>ママ</sup>[鏈]」・「籤票」・「金網」・「万金之革帶<sup>ママ</sup>[袋]」の六篇を収め前年の出版。第二冊は華才子訳で「西門特被殺案<sup>ママ</sup>」・「假死竊産案」・「銀柄斧案」と本篇、合して四篇を収める。

「小説管窺録」に、「惟『虚無党之秘密案』  
 与上年『偵探談増刊』之『虚無党』複訳、  
 本社從英文<sup>マ</sup>訳時未及検出」(『小説林』  
 第三期、光緒卅三年三月)とあるから、  
 前年の「虚無党」と同一作品であること  
 が訣る。但、英文から訳したといふのは  
 少々怪しく、拠つたのは、マックウアッ  
 テル作・千原伊之吉訳『摘陰<sup>マ</sup>發微)奇獄  
 原名欧米名探偵』(明治廿一年十一月、京  
 都・日本同盟法学会刊)ではなからうか。  
 142頁

該論文主題に関係する「虚無党」をあつかつた  
 作品に特化しての解説だとわかる。とはいえ、  
 『奇獄』の一と二をあわせて紹介している。訳  
 者が異なっているが、拠った原本は同一である  
 という認識だ。

中村の説明は、基本的には阿英目録をもとに  
 している。ゆえに収録作品名が阿英目録と同じ  
 箇所を間違ふ。ただし、別資料の「小説管窺  
 録」(阿英の命名)を利用して独自に考察した。  
 すると阿英の示す「虚無党之秘密会」と雑誌  
 『小説林』の広告に出てくる「虚無党之秘密  
 案」が最後の1文字で異なっている。阿英は  
 「会」とし広告は「案」である。だが、そこは  
 無視した。

『小説林』の広告には、重要な手がかりが書  
 かれている。「虚無党之秘密案」と「偵探談増  
 刊」の「虚無党」が同一作品であるという箇所  
 だ。中村は、確実にその事実を把握していた。  
 中国の専門家が現在にいたるまで誰もその意味  
 を理解していないのにくらべると群を抜いてい  
 たといえる。ただし、「偵探談増刊」の「虚無  
 党」が何であるかについては説明がない。あと  
 で検討する。

中村が阿英よりもさらに一步深めた部分は、  
 日本語翻訳を提示したところだ。第1冊、第2  
 冊とも同じ日本語訳を底本にしたという。

書名の「奇獄」つながりで日本の翻訳から漢

訳へと関連づけたい。だから、中村の指摘  
 はあくまでも推測の域を出ない。「ではなから  
 うか」と表現している理由だ。中村自身は漢訳  
 『奇獄』の2冊を見る機会にはめぐまれなかつた。  
 推測であるにしても、ひとつの手がかりを  
 提出したところに意義がある。阿英目録を引用  
 するだけの並みの文章とは、そこが違う。その  
 時点で研究を進めた点は高く評価できる。強調  
 しすぎることはない。

中村の指摘を吸収して『清末民初小説目録』  
 (初版1988)では次のように記述してある。関  
 係部分のみを引用する(562頁)。

奇獄 第1冊

GEORGE McWATTERS“DETECTIVES  
 OF EUROPE AND AMERICA”

千原伊之吉訳『摘陰<sup>マ</sup>發微 奇獄』日本同  
 盟法学会1888.11

奇獄 第2冊

GEORGE McWATTERS の“DETECTIVES  
 OF EUROPE AND AMERICA”ではない?

英文で原作者と原題をつけたのは、それなり  
 の工夫だった。また、千原日訳の角書について  
 は、中村が「摘陰<sup>マ</sup>發微」と誤ったのを「摘陰發  
 微」と正した。『奇獄』第2冊に関しては、千  
 原日訳を示さず、さらに「……ではない?」と  
 書いたのは、当時疑問を感じたのだろう。

『新編清末民初小説目録』(第2版と称する。  
 1997)でもその記述を踏襲する。『新編増補清  
 末民初小説目録』(第3版と称する。2002)、  
 第4版(2011)においても「ではない?」とし  
 つこく書いている。

その「?」がはずれたのは、『清末民初小説  
 目録 第5版』(2013)からのようだ。樽目録  
 第6版(2014)も同様。

すこし詳しく追跡したのは、翻訳小説の確定  
 には、利用できる資料の問題があつて時間と手  
 間がかかることを示すためだ。しかも、樽目録

では初版から第6版の26年間に、原作の特定についてブレが生じている。

#### 中国での記述

中国で『奇獄』を収録する目録は、少なからずある。だいたい阿英目録の引用ですませておわる。英文原作に言及するものはひとつもない。

すべては紹介しない。代表として2点を先に掲げる。

ひとつは、陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典(1897-1929)』(上海教育出版社1994.12)だ。2カ所に見えるからまとめる。

[大典94]1905年

《奇獄》(小説)〔美〕麦格淮爾特著，林蓋天訳，小説林社刊。内収：《假死偽葬》、《郵書之奇福[禍]》、《金剛石之頸鍵[鍵]》、《籤票》等。

[大典114]1906年

《奇獄》(小説)〔美〕麦克淮爾特著，華子才訳，小説林社刊。収《西門特被殺案》、《假死竊屍案》、《銀柄斧案》、《虚無党之秘密会》。

阿英目録によりながら、不安定に写し間違えているのがわかる。また、「一」「二」の区別をつけない。当時としてはめずらしい大型年表だったから、少し落胆した。

もうひとつは、21世紀になってもやはり阿英目録を基本にして記述した陳大康『中国近代小説編年』上海・華東師範大学出版社2002.12)がある(ご注意願いたい、のちの陳大康『中国近代小説編年史』(北京・人民出版社2014.1)は、以前の『編年』とは違う。新しいほうは《奇獄》第二冊とするが「(美)麦格淮爾特著」ははずして原作者名不記である([編年1247])。該年表に記載された2冊をまとめて引用する。

[編年132]光緒三十(1904)年十一月

小説林社出版《奇獄》第一冊，署“(美)麦格淮爾特著，林蓋天訳”，内収《假死偽葬》、《郵書之奇禍》、《金剛石之頸鍵[鍵]》、《籤票》、《金網》、《万金之革帯[袋]》。

[編年132]光緒三十三年(1907)年四月

小説林社出版《奇獄》第二冊，署“(美)麦格淮爾特著，華子才訳”，内収《西門特被殺案》、《假死竊産案》、《銀柄斧案》、《虚無党之秘密会》

阿英目録がそれぞれの刊行を1905年と1906年にしていたのを、陳大康は正した。そこはよろしい。だが、両書ともに「(美)麦格淮爾特著」とするのは阿英と同じだ。

昔の書物をわざわざ引っ張り出していると思われるかもしれない。研究が一直線に進んでいるわけではないことを示すためには、過去の間違いを直視する必要がある。

中国では変化がゆっくりと生じたように思われる。樽目録第3版が中国で刊行された。たぶんそれが原因のひとつだろう。

第3版は、中国では広く利用されているらしい。すでに第6版が公開されている現在でも、あいかわらず10年以上前の古い第3版を参考資料にあげる研究書がある。名前をあげれば、劉穎慧『晚清小説広告研究』(北京・人民出版社2014.9)、あるいは謝仁敏『晚清小説低調研究

以宣統朝小説界為中心』(北京・中国社会科学出版社2014.10)だ。彼らには、ネットを見ていない、あっても利用しないという暗黙の了解が成立しているのか。単に中国のネット事情が原因なのかはわからない。どちらにせよ、紙媒体の目録しか利用しないのであれば、情報の近代化から置き去りにされている。いうまでもないが、全員がそうであるわけではない。

『奇獄』にもどる。



任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』(北京師範大学出版社2013.3)がある。

「附録二 翻訳偵探小説目録(1896-1949)」「附録三 原創偵探小説目録(1901-1949)」の関連部分については、樽目録第3版を見ている。なぜわかるかといえば、「夢里偵探」の発表年を1901年と表示し、調べようがないと書く(727頁)。樽本昭雄編と誤記しているのがその証拠だ。批判するときだけ文献名を引き合いにだすのは、中国学界の慣行だ。参考文献に日本の目録を掲げると都合の悪いことがあるのだろう。もっとも、任翔たちは参考文献そのものを作成していない。先行目録については、無断借用するのが彼らの常識と思われる。『奇獄』第1冊第2冊とも同じ原作にして英文を書いているが(594頁)、ここで示す必要もない。興味のある人はそちらをご覧ください。

李艶麗「晚清日語小説翻訳書目録(1898-1911)」(『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』上海社会科学院出版社2014.8。[艶麗14]と略称)がある。

樽目録第3版にもとづいて整理したと説明する(168頁)。そればかりか、第6版がネット上で公開されていると書いているのだから利用しているのだろう。広く情報を収集する優秀な研究者のひとりだ。

該当箇所を示す。

[艶麗14-111]《奇獄》, 林蓋天訳, 小説林社第1冊1904, 第2冊1907

(美) George McWatters“Detectives of Europe and America”

(日) 千原伊之吉訳《摘陰発微 奇獄》, 日本同盟法学会1888

すっきりまとめてあるように見える。

いうまでもなく李艶麗の著書は、書名からもわかるように日本語小説を研究対象にした専門

書だ。ゆえに『奇獄』の第1冊、第2冊を収録しているのは、両書ともに千原日訳が底本だと考えているからだろう。

ただし、第2冊を漢訳した華子才の名前が抜けている。樽目録第6版を知っているにしては、「偵探小説」という角書がない。千原訳にある「米ジヨルヂ、マクウアツテルス著」も採録していない。

ここでは、収録作品の細目を明らかにしていない。そのかわりに、作品別にばらして別の場所に配置している。『奇獄一』は6作品のすべてを示す。ただし、『奇獄二』については、「虚無党之秘密会」のみを(美) George McWatters 著として本文51頁に掲げる。残りの3作品には言及がない。そういう不具合はある。結局のところ、李艶麗も阿英目録を継承していることが理解できる。

付建舟の著作は注目に値する。「清末民初小説版本経眼録」の書名でシリーズ化されており、現在5集まで刊行される。文字通り実際に確認した書籍だけを集める。表紙、奥付写真を掲げているのがよらしい。実見したという証拠になっている。また読者にとっても親切だ。

2種類の『奇獄』をともに収録している。特に「二」は、珍しい(後述)。

先に『奇獄一』を見る。

付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』(杭州・浙江工商大学出版社2013.1。23頁)から、かいつまんで説明しよう。

表紙は「奇獄一」、奥付に「小説林偵探小説之一」と見える。さらに、発行兼編訳者: 小説林社、印刷所: 日本・翔鸞社、総発行所: 上海・小説林、甲辰(1904)十一月初版とある。

実物を提示してさすがに詳しい。阿英目録にあった書名の「奇獄 第一冊」は間違いということになる。表紙および奥付の写真を見れば『奇獄一』が正確だ。また、阿英が書いた「光緒三十一年(1905)」も誤り。刊年をなぜ誤記したのか。単なる誤植だろうか。その理由はわ

からない。

付建舟は、本文説明において収録した6篇の題名を示している。興味深い。なぜなら、阿英目録の記述と一部が異なるからだ。先に、ママと[ ]で示した箇所である。

すなわち「金剛石之頸鏈[鏈]」と「万金之革帯[袋]」だ。[ ]内が正しい。「鏈」が「鍵」になったのは見誤っての誤植か。「袋」を「帯」にしたのは同音だから生じた勘違いらしい。いずれも阿英目録の誤記だと判明する。

写真を見れば、小さく「偵探小説ノ奇獄一」と示しているのに目がいく。角書は「偵探小説」となる。別の機会に確認した本文写真にもそう明示されている。阿英の編集方針は、角書を採用しない。目録に角書が見えない理由だ。

付建舟が関連部分を資料として採録しているのは、貴重だといえる。「例言」から原文のまま部分引用する。

此書原名《<sup>ママ</sup>欧美偵探史》,系美国麦枯滑特爾氏所著,日本原伊之吉代以《奇獄》二字,今仍其名。(中略)

此書計二十章,約共六万余言,今分三卷,先出其一。

カッコ、句読点は付建舟が補ったもの。原文には施されていない。だが、許容範囲内だと考える。ママとしたのは付建舟による写し間違いである。

この「例言」により『奇獄一』の原作が日本語の千原伊之吉訳だとわかる。中村忠行の推測は、当たっていた。

興味深いと思うのは、20章ある(といってもそれぞれは独立した作品)日記を漢訳では3巻に分割するという説明だ。その第1冊が『奇獄一』ということになる。なるほど、『奇獄二』があるはずだ。そう思うのが普通だろう。ただし、『奇獄三』は今のところ存在が確認されていない。私は、刊行されなかったと見る。理

由のひとつは、当時の新聞広告にも見あたらないからだ。

付建舟の説明は、よく書かれていると思う。しかし、重要な欠落がある。原作者と訳者に言及しない。「麦枯滑特爾」のほうは「例言」に出てくるから、よしとしよう。しかし、訳者の林蓋天を落としたのは奇妙に感じる。両者とも本文に明記されているからなおさらだ。

ほとんど同文が付建舟『清末民初小説版本経眼録・日語小説巻』(北京・中国致公出版社2015.1.123-124頁。[付日]と略す)に見える。後から入手した。違いは樽目録第6版を引用しているところだ。

原作から日記を経て漢訳へ

ここで『奇獄一』について述べておこう。英文原作と千原日記、さらに漢訳をわかる範囲で比較対照することにしたい。

いつも言うように、研究環境が変化している。以前には確認することが困難だったいくつかの資料が、簡単に入手できる。英文原作全文は、ネットから引用する。千原日記は架蔵のもの。漢訳(再版)は、中国の古書ネットに掲載された部分だけを見る。

これら3種をその翻訳の流れにそって並列する。

[英] GEORGE McWATTERS. *DETECTIVES OF EUROPE AND AMERICA, OR LIFE IN THE SECRET SERVICE*. 1877

[日] 米ジヨルヂ、マクウアツテルス著、千原伊之吉訳『摘陰発微 奇獄』日本同盟法学会1888.11.30

[漢] (美) 麦枯滑特爾著、林蓋天訳『奇獄一』小説林社 甲辰(1904)十一月初版/乙巳六月再版

漢訳初版の印刷は、日本・翔鸞社だった。再版では上海・作新社印刷局に変更された。

『奇獄』英文原作と千原口訳 漢訳(再版 古書ネットより)

DETECTIVES  
OF  
EUROPE AND AMERICA,  
OR  
LIFE IN THE SECRET SERVICE.

A SELECTION OF CELEBRATED CASES  
IN  
GREAT BRITAIN, FRANCE, GERMANY, ITALY, SPAIN, ROMANIA,  
POLAND, EGYPT, AND AFRICA.

A REVELATION OF STRUGGLES AND TRIUMPHS  
OF THE MOST KNOWN DETECTIVES OF THE GLOBE FOR THE PAST  
TWENTY-FIVE YEARS.

PROFUSELY ILLUSTRATED.

EDITED BY  
GEORGE S. MOWATERS,  
LATE MEMBER OF THE AMERICAN SECRET SERVICE.

HARTFORD:  
THE J. B. BURR PUBLISHING CO.  
1880.



Go. S. Mowaters

Photographed by Brady.

12 CONTENTS.

A GANG OF BOLD ROBBERS IN FRANCE—EXPERIENCE OF THE PARISIEN DETECTIVE, DEMYLAUD.

A GANG OF TWENTY-ONE ROBBERS, MEN AND WOMEN—A BOLD ROBBERY OF A JEWELRY STORE, WITH ATTEMPT AT ASSASSINATION—THE LANGUAGE OF THE THIEVES IN PARIS (ABOUT)—WHAT SHALL EMBROIDER—MR. BARKERLAND OF THE TRACK—THE VILLAGE BAND—MURDER—CORRESPONDENCE OF THE GANG—THE ROBBERY ON THE BRIDGE OF MR. BARKERLAND—WHAT DO THE ROBBERY CONTAIN—THE HOME OF THE COLONEL BECK—A PATRIOTIC LETTER—GRAFT, BAYLES, AND PARVAL, THE LEADER OF THE GANG—COURT MARTIAL, THE CORRESPONDENT—A SKILLED ROBBERY OF THE HOUSE OF MR. BARKERLAND—WHAT THE DETECTIVE TAKEN ARE DOING—THE GANG BEFORE COURT—GRAFT, THE MARTIN-PARVAL, THE CONFESSOR—A PALE IN THE PART OF THE ROBBER, THEIR REGISTER OVERLOOKED—HOW THE PRINCE COURT'S PROCEED—GRAFT COMPARES HIMSELF WITH CHRIST—THREE LIES IN THE GANG—CLOD, THE PURCHASER OF STOLEN GOODS—A ROBBERY OF FIFTEEN THOUSAND FRANKS OF MR. BARKERLAND—WELSH AT RIVE BRIDGE—AN IMPROBABLE TOOL FOR COUNTERFEITING CITY STARS—ATTEMPT AT ROBBERY AT FEVERIDGE—PARVAL'S LIFE WEIGHING TWO HUNDRED AND FIFTY KILOGRAMS—BALLPACAL TRANSPORTED—GRAFT, THE PATRIOTIC LETTER, IN COURT—SPEECHES OF THE CRIMINAL—THE ARREST—GRAFT—THE CRIMINAL MUST THEIR DOOM.

EXPERIENCES OF MR. BREITENFELD, THE AUSTRIAN DETECTIVE.

A RICH YOUNG MAN—A LETTER-CARRIER MURDER—HORRIBLE SCENE IN THE ADVENTURES OF MR. ALPHONSO BENOZZO—A HANDSOME AND A HAT—DIFFERENT PLANS IN AN OTHERWISE WELL-PLANNED AND RESPECTED CRIME—HOW THE AUSTRIAN DETECTIVE MAKES USE OF THE TELEGRAPH—TWICE HELD—A VERY SOCIAL ROBBER PART—A MURDER AFTER DINNER—MR. FRANCESCO UNDER ARREST—HIS REFERENCE AND JUDGMENT.

A CLEVER DIAMOND SWINDLE.

A NECKLACE WORTH 450,000 FRANKS OBTAINED BY CLEVER SWINDLING—A BIRD TO BE PLAYED ON THE ROBBERY TOLD AND—A CRYING SIBY OF SWINDLER—A HANDSOME AND ACCOMPANIED YOUNG LADY—FATHER VERNER JEWELER—THE DETECTIVE RECEIVED—ON THE TRACK—WORLD AGAIN—MR. BARKERLAND—MR. BARKERLAND—THE DETECTIVE—GREAT DISAPPOINTMENT—CUNYATE, HELGOLAND, AN ENGLAND PLACE OF REFUGE—THE BIRD WAS CAPTURED—LONDON JOURNAL AND HIS CORRESPONDENCE—MR. BARKERLAND'S ADVICE.

明治二十一年十一月廿九日刷成  
明治二十一年十一月三十日出版御局

譯述者 大分縣平良 千原伊之吉  
發行所 日本同盟法學會  
印刷者 吉田 庄太  
發行所 日本同盟法學會

定價金十五圓

米國マクウアッテルス氏原著  
日本同盟法學會發行  
日本千原伊之吉譯述

奇獄全



乙巳六月再版

小 說 林  
版 權 證

總發行所 上海四馬路廣生里  
印刷所 上海四馬路廣生里  
分售處 各 大 書 坊

小説探奇獄

第一章 假死偽葬

倫敦爲世界唯一之大都會其間異者不齊邪正並集而其最足以妨害法律者莫如偽造紙幣一事然此輩輩羽花飛騰處處警察宜深思慮也種種偵探手段仍探然不得其述時下偵探中得精熟名長官力以是相嗚呼謂得一知己可以無憾此案雖難着手然不得不竭力探察冀以保一生之名譽除社會之大害也

余所承辦之偽幣犯實一巧妙無比之巨猾其夥伴雖有數名然皆隱見不時出沒無定方偵察始有一布控度其人者形迹頗爲可疑因竊獲其一

例言

一此書原名歐美探偵偵更係美國麥格特爾氏所著日本千原伊之吉代以奇獄二字今仍其舊

一此書記事材料皆採輯探偵更之手頁日記報告等故篇中純用自叙體譯者亦仍其舊至於探偵更之名或顯或隱亦傳事不傳人之意也

一原文於官廳情狀描寫盡致故其敘事期期乎直譯之未免令讀者生厭今於下筆時隨時節以期簡明然自謂未失原書之意旨

一此書計二十章約共六萬餘言今分二卷先出其

日本千原訳本には「凡例」がある。そこで原作に言及している。その部分を引用する(変体仮名は置き換えた)。

本書八原名をデデクチーフス、オフ、ヨウロフ、エンド、アメリカと云ひ米国ジヨルヂ、マクウアツテルス氏の著述に係る原名を直訳すれば欧米探偵吏とすべきなれども繁を省き奇獄の二字に代ふ出版は千八百七十八年にして其より前二十五年間に起れる事実を採輯せるものなり

英文原書の発行年が1877年、千原は1878年、写真で掲げたのは1880年と異なる。人気が高くそれほど多く印刷された書籍だとわかる。

漢訳『奇獄一』にある「例言」は、この日訳本「凡例」にもとづいていることが理解できる。しかも、漢訳で説明する「二十章」は、日訳に収録する20章と一致する。また、問題は、あるいは誤解を生じさせる原因になったのが、この漢訳「例言」の「20章を今3巻に分ける」という説明なのだ(後述)。

英語原作から日本の千原日訳を経て漢訳された6作品を参考までにまとめておく(日訳順)。

[英] THE EXPERIENCE OF JOHN SPINDLER, THE LONDON DETECTIVE, WITH A GANG OF COINERS.

[日] 第1章 假死偽葬

[漢] 假死偽葬

[英] EXPERIENCES OF MR. BREITENFELD, THE AUSTRIAN DETECTIVE.

[日] 第2章 郵書ノ奇禍

[漢] 郵書之奇禍

[英] A CLEVER DIAMOND SWINDLE.

[日] 第3章 金剛石ノ頸鏈

[漢] 金剛石之頸鏈

[英] LOTTERY TICKET, NO. 1710.

[日] 第4章 籤票

[漢] 籤票

[英] LEWELLYN PAYNE AND THE COUNTERFEITERS.

[日] 第5章 金網

[漢] 金網

[英] THE COOL-BLOODED GOLD ROBBER, AND THE WAY HE WAS TRACKED.

[日] 第6章 万金ノ皮袋

[漢] 万金之革袋

漢訳『奇獄一』に収録してある各作品の題名は、日訳をそのまま利用していることが理解できる。そのほかの原作と日訳の対応関係は、文末にまとめた。参照されたい。

以上が基礎事実だ。つぎに、中国で発表された研究論文が、どれくらいそれらの事実を把握しているか見てみよう。

『奇獄一』に関する研究者の理解

『奇獄一』については、さきに付建舟の記述を紹介した。その説明は詳しい。

最初は英文原作と日訳には言及しなかった。付建舟の編集本は、小説の実物を採録するところにその特徴がある。そこに価値があるのは確かだ。しかし、翻訳については、一歩先に進めるといふ研究姿勢がそこでは見えなかったのも事実だ。いっておかなければならないのは、今では違う。紹介したように[付日123]において樽目録第6版を引用して英文原作の多くを明らかにしている。

張沢賢『中国現代文学翻訳版本間見録続集1901-1949』(上海世紀出版股份公司遠東出版社2014.7)は、従来通りだ。初版の表紙と奥付の写真(口絵にはカラー写真)を掲げている。実物の「例言」から引いているのはいいが、ただそれだけ。「原名歐美探偵吏」の英文綴りが何かは書かない。

樂偉平『小説林社研究』上下(台湾・花木蘭文化出版社2014.3 古典文献研究輯刊18編 第18、19冊)はどうか。

樂偉平の該書は、小説林社とその関係者などについて資料を網羅して論じる。小説林社が刊

行した小説類は、そのほとんどを実物で確認するほどの徹底ぶりだ。賞讃に値する。小説林社を主題にした貴重な研究成果だと思う。ゆえに、樂が『奇獄』についてどのように説明しているのか、知りたいと思うのは当然だろう。

まず「附録七 小説林社単行本小説目録」(383頁)から見る。2冊が同時に掲げてある。罫線は省略する。

奇獄一(原名歐美探偵史) 二 美国麦枯滑特爾 丹徒林蓋天訳述 甲辰十一月丙午閏四月再版\*2  
奇獄二(原名歐美探偵史)  
吳門華子才訳述 丁未四月

上の引用を見るかぎり、『奇獄一』『奇獄二』ともに「美国麦枯滑特爾」と明記されていることになる。著者不記とは書いていないからそうだろう。ならば、阿英の把握と同じだ。ただし、阿英が、(美)麦枯滑特爾著と表記を誤ったところは訂正している。

樂偉平は、「原名歐美探偵史」の「史」を「史」に見誤ったらしい。誰にでも思い込み、あるいは不注意による間違いはある。

「小説林大事記」甲辰十一月の項目(279頁)も「《奇獄》一(原名歐美探偵史), 美国麦枯滑特爾著, 丹徒林蓋天訳述」と同じ記述だ。こちらにも収録作品の細目はない。

本文168頁では、林蓋天について説明するなかで英文原作を明示している。すなわち「原書是美国麦枯滑特爾(George Mcwatters 的 *Detectives of Europe and Africa*, 但林蓋天從日本千原伊之吉的《奇獄》訳出」というのだ。

なぜだかここでは原著者の漢字表記が阿英目録と同じで間違っている。同一著者を別の漢字表記にするのは、最終的な確認をしなかったからか。

また、英文書名の一部が America アメリカから Africa アフリカに変更されている。誤った理

由は不明。

しかも、収録作品の「假死偽葬案」はあきらかに誤記だろう。

さらには、6章あるといいながら5作品しか示さず、「万金之革袋」が未収録だ。ますますわけがわからない。

樂偉平は、『奇獄一』と『奇獄二』の関係について、興味深いことを書いている。これは、あとで『奇獄二』を説明するときに紹介したい。

中国の専門家による記述には、ばらつきがある。共通しているのは、千原日訳に言及していても、収録作品と対照はしていないことだ。たぶん彼らは千原日訳の実物を見ていないのだろう。GEORGE McWATTERS すなわちマクワッターの英文原作についても同じことだ。私が研究環境が変化したというのは、主として電腦網のことを指す。しかし、それを利用する中国の研究者は多くはないらしい。

つぎに『奇獄二』を取り上げる。

奇妙な『奇獄二』

『奇獄二』は、付建舟『清末民初小説版本経眼録三集』(北京・中国社会科学出版社2013.8)に収録されている。203-204頁だ。

初版本の表紙と奥付の写真を掲げるのが珍しい。付建舟の説明によれば、表紙に「奇獄二」と題し、偵探小説。奥付は次のとおり。編輯者 吳門華子才、印刷者 小説林社活版部(上海派克路福海里)、発行者 小説林社総發行所(上海棋盤街中市)、丁未年(1907)四月初版発行。たしかに、そう書いてある。だが、そこにある表紙写真にはどこにも「偵探小説」の文字がない。奥付写真も同様だ。そこは付建舟の書き誤りではなからうか。

奥付写真が示されたから、阿英目録の「光緒三十二年(1906)刊」が間違っていることがわかる。

ところで、付建舟の説明が不十分であるのに

気づく。

こちらにも原作者の表示がない。さらに収録作品の細目がない。『奇獄一』では細目を示していた。なぜ同じことが『奇獄二』ではできないのか。

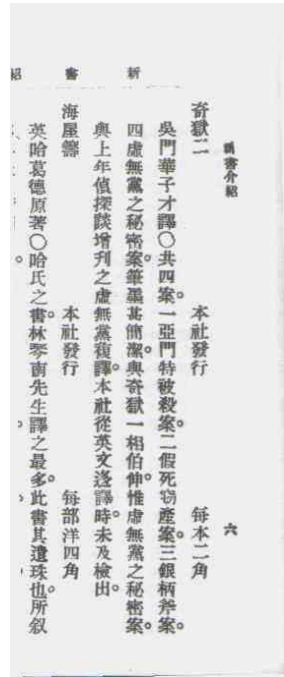
付建舟の経眼録シリーズは、前述のとおり実物で確認したものだけを収録するところに特徴がある。だから、表紙あるいは奥付の写真を添えてその証拠としている。見ているはずなのに、どうして原作者名がないのか不思議に思う。もともと明記されていないのか、それとも付建舟が記録し忘れたのか。刊行されたシリーズの5冊を見れば、厳密に記述するのが付建舟の編集方針だと理解できる。だから、忘れるはずはないだろう。明記されていないならば、原作者名はない、と念のために記述してほしい。なにも書いていないから、どちらかはっきりしない。

『奇獄一』の「例言」で説明されていた。全20作品を3巻に分割して出版するという説明だ。付建舟は、この「例言」をかたく信じているらしい。だから『奇獄二』も麦枯滑特爾の原作を漢訳したもので、さらには『奇獄三』も刊行されているはずだと推測する。そう聞いて、私は驚かないし落胆もしない。そうなのか、と思うだけ。英文原作、日訳、漢訳を比較対照する必要があると気づいていないようだ。「例言」のみにすがりついた推測であるところが危うい。

『奇獄二』については、実をいうとはるか昔、すなわち半世紀以上前の1960年からすでに小説林社による説明があると知られている\*3。中村が阿英編集本にもとづいて一部を引いていた。ここでは、『小説林』第3期(丁未三月)に掲載された「新書紹介」から引用する(阿英編集本からの引用ではないことを示すために実物の写真を掲げる)。

奇獄二 本社発行 每本二角  
 吳門華子才訳 共四案。一亜門特被殺案。  
 二假死窃産案。三銀柄斧案。四虚無党之

秘密案。筆墨甚簡潔。与奇獄一相伯仲<sup>マ</sup>[仲]。惟虚無党之秘密案。与上年偵探談增刊之虚無党複訳。本社從英文译訳時。未及検出。



『小説林』第3期掲載

重ねて示すのは、ここが重要な意味を持っているからだ。

広告類には資料的価値がある。それを理解しなかった上海書店の編集者が雑誌『小説林』を影印したとき広告類をすべて削除した。現在流布している影印本に見えない理由である\*4。

新聞雑誌に掲載された出版広告は、分量、種類ともに多量だ。普通に誤植も見られる。ただし、上の出版広告は『奇獄二』の出版元である小説林社が出稿したものであるからそれなりに注目してみよう。

すると、阿英目録に示してある収録作品の題名が、微妙に違っていることがわかる。

「西[亜]門特被殺案」「假死窃産案」  
 「銀柄斧案」「虚無党之秘密会[案]」



ママと[ ]で示した。阿英が記述する「西門」ではなく正しくは「亜門」、「秘密会」ではなく「秘密案」であるらしい。「あるらしい」と書かざるをえないのは、実物で確認できないからだ。中村は、後者については漢字の違いを無視して阿英説を採用した。それは重要ではない。

大きな意味を持っているのは、後半部分だ。

ここでは、「偵探談増刊」の「虚無党」と重複してしまったことを述べる。のちの研究者全員がそう理解した。もう少し説明すれば、単行本(らしい)『偵探談増刊』に収録されたひとつの作品「虚無党」という関係になる。異義を提出した人はいない。同時に、『奇獄二』は英文原書にもとづき漢訳されたことを明らかにした。中村は、この箇所には懐疑的だった。

ご注意願いたい。該文に『奇獄一』が出てくるが、『奇獄二』と同一原作者の作品によっているとは書かれていない。ふたつの文章が簡潔であるのが共通している、というだけだ。先回りしていえば、ここを読んだ研究者が、勝手に同じ原作だと思いこんでいるにすぎない。その最初の研究者は、阿英ということになる。

収録作品の題名を見ると、『奇獄一』とは命名のしかたが異なる。多く、といっても3作品だが、「案」すなわち日本語でいえば「事件」で共通しているのだ。「虚無党之秘密会[案]」については、「案」になっているのかわかば不明。いずれにせよ訳者が変更になったのが原因かと推測する。

たぶんそこらあたりを説明しているのだろう。樂偉平は、日訳本が原文の多くを省略していることを説明したあと、つぎのように書く。

丁未(1907)年四月に出版された『奇獄』二は、呉門華子才によって英文から翻訳されることに改められた。同一の書籍が、日本語訳本を採用したのから英語原本へと変更され、さらに訳者も交替し

たのである。小説林社の厳密な出版態度を見ることができる。(丁未年四月出版的《奇獄》二、即改由呉門華子才從英文訳出。同一本書、從採用日文訳本轉為英文原本、並更換訳者、可以見出小説林社嚴肅的出版態度。163頁)

この文章から、樂偉平が『奇獄』の「一」「二」ともに同一書籍を漢訳したものだと考えていることがわかる。

樂偉平は、小説林社の出版態度が厳密だと賞讃する。だが、おかしいだろう。該社がもともと厳密な出版態度を有しているのなら、『奇獄一』も最初から英文原書にもとづいて直接漢訳するのではなからうか。千原日訳からの重訳である理由が説明できない。樂の解説は、出版元による宣伝文句を自分の言いたい論旨に解釈しなおしたことを示している。

私が上で注意を喚起した。樂偉平は、もの見事に陥穽に落ちている。『奇獄一』『奇獄二』ともに同じ書物の漢訳だと信じた。

#### 問題の所在

重要な問題が発生している。

何度でも強調したい。『奇獄』は、「一」「二」ともに麦枯滑特爾(マクワッター)の原作で一致している、とすべての専門家が考えている。実物で確認している人を含んでいるから重症だといえる。それで正しいのか。

小説林社による説明は簡潔だ。『奇獄二』を紹介して『奇獄一』の書名を出す。『奇獄一』の「例言」で3巻に分けて出版すると説明していた。『奇獄二』も同じ原作だと自然に読むことができる。阿英を先頭にして皆がそう理解した。

私にいわせれば、これは小説林社刊行の「虚無党之秘密会[案]」が、別のところで発表された「偵探談増刊」の「虚無党」と重複してしまったという説明にすぎない。それでは、あちら

の「虚無党」もマクワッターの原作なのか。

疑問の目をもってもういちど見なおす。

どうやら、阿英からはじまる専門家たちが、英文原作と『奇獄二』の本文を比較対照して出した結論ではなさそうだ。阿英目録を含んだ関連資料、すなわち状況証拠から、漢訳『奇獄二』がマクワッター原作だと断定している。確認が必要とされるところだ。

そもそも「偵探談増刊」の「虚無党」とは、なにか。ここにこそ謎をとく鍵がある。(問題解決篇につづく) 罫

=====

附：英文原作と日訳の対照

[英] THE MARKED BILLS.

[日] 第7章 金乎命乎

[英] THE SORCERESS' TRICK, AND HOW SHE WAS CAUGHT.

[日] 第8章 玉手匣

[英] THE DISHONEST CLERK, AND THE FATAL SLIP OF PAPER.

[日] 第9章 断筒

[英] THE SKELTON.

[日] 第10章 骸骨

[英] THE PECULIAR ADVERTISEMENTS.

[日] 第11章 不了文字

[英] THE THOUSAND DOLLAR LESSON.

[日] 第12章 麻醉薬

[英] WILLIAM ROBERTS AND HIS FORGERIES.

[日] 第13章 摹筆

[英] THE GAMBLER'S WAX FINGER.

[日] 第14章 臘指

[英] THE WOLF IN SHEEP'S CLOTHING.

[日] 第15章 羊衣狼心

[英] OLD MR. ALVORD'S LAST WILL.

[日] 第16章 遺言状

[英] ABOUT BOGUS LOTTERIES.

[日] 第17章 無形会社

[英] A FALSE HEIR TO A LARGE POSSESSION.

[日] 第18章 冒嗣ノ押領

[英] MYSTERY AT NO. 89-STREET, NEW YORK

[日] 第19章 奇病

[英] CIRCUMSTANTIAL EVIDENCE: A KNOT STILL UNTIED.

[日] 第20章 的証

【注】

- 1) 阿英「晚清小説目」「晚清戯曲小説目」上海文藝聯合出版社1954.8 / 増補版 上海・古典文学出版社1957.9新一版、北京・中華書局1959.5
- 2) 『小説林』第9期「小説林書目3」は原著者不記、丙午閏四月(1906)とする。これによったか。
- 3) 阿英編「小説管窺録」(『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究巻』北京・中華書局1960.3上海第一次印刷 / 台湾・文豊出版公司1989.4影印。510頁)。該文は、最近では次の2カ所にも収録される。陳大康『中国近代小説編年史』(北京・人民文学出版社2014.1)の1264頁、および2542頁に重複させている。略号 [編年]
- 4) 影印本が広告類を省略した事実は、研究者に周知のものかどうかは知らない。はやくから指摘があることをいっておく。たとえば、樽本照雄「気になる『繡像小説』の奥付」『中国文芸研究会会報』第59号1986.5.31、1-3頁。要旨：『繡像小説』発行遅延問題研究の一部である。奥付に見える販売取次所の広告に変化が見える。世界繁華報館の名前が消失するのは、李伯元の死去に関係することを述べる。『清末小説論集』(1992)所収

『清末民初小説目録X(エックス)』を公開準備中です

#### 注目点4：『官場現形記』の海賊版

樽本照雄

【前言】陳大康著『中国近代小説編年史』(2014)について原稿を準備している。長くなりそうだ。整理がすんで発表するのはいつになるかわからない。そこで緊急に一部分を抜いて先行発表する。「注目点4」と奇妙に思われるであろう題名になった。

李伯元「官場現形記」は、刊行の途中から海賊版が出てくるほど読者の評判が高かった。

樽本「『官場現形記』裁判」(1982)\*1では、海賊版の問題を提出したが、資料が不足しており解決することができなかった。

ひとつのきっかけは、劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」(『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』2006年第3期(総第185期)2006.5(.15))\*2だった。新聞広告を活用して、1904年に行なわれた裁判の経緯を紹介した。高く評価できる。これも陳大康の指導があったのだろう。

新聞広告にもとづいた裁判の経過を簡単に紹介する。

海賊版『官場現形記』は、日商朝日洋行を經由し、日本知新社の中国人支配人席粹甫が窓口になって販売した。それに対して、原本を刊行する世界繁華報館の李伯元が提訴する。その結果、中国人の席粹甫が海賊版を作成販売した罪で逮捕され首かせ三日の刑に処せられた。

海賊版は、「洋装」を売り物にしている。李伯元が主宰する世界繁華報館の原本は線装であるのを意識してのことだ。新聞広告を見る限り、日本を強調していることがわかる。

陳大康も同じ主旨で文章を発表している。陳大康が劉穎慧と異なるところは、ひとつの疑問を提出したことだ。すなわち、処罰されたのは、中国人「支配人席粹甫」だけである。広告に出てくる日本人の「日本知新社主人弼本氏」はなぜ無傷なのか。李伯元にとっては、裁判には勝ったもののいくらかふがないものである(有点窩囊)、と。陳大康は、日本人が処罰されていないことに特別な不満を感じていることを隠さない。しかも、この不満は後年まで持続した。

追跡したのが新聞広告だけならば、あるいはそういう結果になるかもしれない。私が、自分で調査をやりなおして理解したことだった。

陳大康と劉穎慧の論文を読んだとき奇妙に感じたことがある。海賊版である日本吉田太郎著『官場現形記』そのものについての説明がないことだ。発行元の日本知新社は出てくる。だが、日本吉田太郎の名前は新聞広告には出てこない。ということは、陳大康と劉穎慧の師弟は、肝心の海賊版そのものを見たことがないらしい。もの足りなく思ったものだ。

私は、新聞のマイクロフィルムを中国から取り寄せて独自に調査をした\*3。

新聞広告ばかりでなく、裁判結果を報道する記事も探し当てた。陳大康と劉穎慧は、新聞広告は見たが同じ新聞に掲載された報道記事は探さなかったらしい。後で触れる。その結果は、意外なものだった。

海賊版『官場現形記』そのものは、日本吉田太郎著と名乗り日本知新社が光緒三十年六月(1904)に刊行した。該書は、私の手元にある。

日本を前面に押し出した刊行物だ。日本人が日本で印刷したものにしては、年号の明治を使用していないのがあやしい。中国で印刷製本したものだ。それに気づく中国人研究者は、

いないらしい。実物を見ていないのならば、しかたがないか。私は、そうは思わないが。

それにしても、阿英が彼の目録に収録していることを、陳大康も劉穎慧も知らないのだろうか。阿英目録81頁に掲載されている箇所を陳大康は無視したか、忘れた。念のため書いておく(傍線省略)。「又光緒三十年(一九〇四)翻本。托日本知新报社,吉田太郎著」。樽目録第3版にも当然ながら記載している。

そこで、陳大康も劉穎慧も存在に気づかなかった新聞の報道記事の要点を紹介しよう。

『同文滬報』『中外日報』1904年11月22日付に「席粹甫冒日本人(之)名」と明記してある。だが、気づかなかつたから『編年史』769頁の該当個所に、記事の掲載はない。

結局のところ、日商朝日洋行、日本知新社、弼本氏および日本吉田太郎は、すべて席粹甫の自作自演だった。中国人が日本人になりすまして海賊版を作成販売した。これが『官場現形記』海賊版事件の真相なのだ。裁判に日本人が出てこない理由でもある。陳大康は、なぜ日本人が処罰されないのかと不満げだった。真相を知ってしまえば、そう思うほうがおかしい。中国人が日本の名称を悪用した。日本はもともと海賊版に関係がない。

2008年に私は論文を公表した。ウェブサイトにも掲載して発信した。そうして今回の陳大康『編年史』だ。

陳大康は『編年史』の「序」において海賊版問題を紹介し、つぎのように書いている。

時間の順序にそってその数日の新聞を読めば、事件全体の進展と判決が下るまでの過程は明白なのである。2頁

新聞広告を追跡した経験からそう書いた。陳大康は、該書「導言：過渡形態的近代小説」で、やや詳しく事件の推移を紹介している。

私が不思議に思うのは、陳大康がこの『官場

現形記』海賊版を作成し販売したのは日本人だと今でもかたく信じ込んでいることだ。

いわく、『官場現形記』の人气が非常に高いのを見た「日商朝日洋行は、分不相応な高望みの気持ちににわかには抱き、東京で印刷した洋装本を中国に輸送し、知新社の名前で発売した」(151頁)

海賊版の版元知新社が出稿した新聞広告の内容をそのまま信用している。これには驚いた。窃盗犯がいうことを、疑いもせず本当のことだと思っている。書いてあるものは、なんでも信頼するらしい。ここには、批判的に資料を検討する研究姿勢が見えない。

裁判結果も新聞広告を引用して紹介する。裁判の報道記事ではないことを再度いっておこう。そこには、席粹甫の名前だけがある。日商朝日洋行、日本知新社、および弼本氏も消失した。くりかえすが『編年史』において日本吉田太郎は、最初から最後まで登場しない。

陳大康は、ここでも数年前と同じ疑問をくり返している。

「処罰を受けたのは、なぜ「支配人席粹甫」だけなのか、身はフランス人の日本人「知新社主人弼本氏」が少しも傷ついていないのはなぜか。この裁判は、勝利したとはいえいくらかふがないものである(有点窩囊)」(152頁)。部分的に使う語句が以前と一致している。陳大康にしてみれば、疑問が解決されないままの状態にいる。

実在しない知新社主人弼本氏が、なぜフランス系日本人(身為法人的日人)になるのか。わけがわからない。それにしても、陳大康は海賊版には日本人が関係したとどうしても思いたいらしい。

陳大康「論近代小説伝播中的盜版問題」(『文学遺産』2015年第1期 2015.1.15)が書かれた\*4。

陳大康・華東師範大学中文系教授の上記論文は、『官場現形記』海賊版については以前とほ

身為報人兼小説家的李伯元很清楚盜版者的無孔不入，他自七月二十日到十月初不斷在各報刊載廣告，在《中外日報》上就至少刊載了十九次：“稟准捕房查辦翻刻，各書庄幸勿誤收被累。”可是小說三編出版才三個月，盜版書就已公然銷售，編排與書價全同原作。盜版者是日本東京金港堂，運往中國代銷的是朝日洋行知新社，自光緒三十年九月初七日開始，它在報上公然連續廣告“現今在領事衙門備案，准本社出售，並禁止他人冒牌仿造”，“查出即稟提究不貸”<sup>②</sup>。盜版者時有，但在報上公開亮出名號，還

論近代小説傳播中的盜版問題

弼本氏”<sup>①</sup>，即日商親自出面表明主角身份，言下之意是該找我論理，怎麼却與我的代理人打官司？

這正是日本人的狡猾之處，因為起訴弼本氏，按不平等條約中的領事裁判權，案件應由日本領事審理，這意味著李伯元的官司必輸無疑。李伯元之所以向會審公堂報案，而且是以“經理人席粹甫”為被告，目的也正是讓裁判權落入日本領事手中，何況租界當局曾批准過李伯元保護版權的申請。就在弼本氏刊載廣告的當日，即光緒三十年十月十五日，會審公堂拘提抗傳不到的席粹甫，李伯元終於贏得了這場官司。第二日，李伯元不惜工本用大字在《新聞報》、《時報》、《中外日報》等大報刊載《特別告白》，醒目廣告通報審判結果：

翻刻《官場現形記》者看，看，看！出售翻刻《官場現形記》之席粹甫前因抗傳不到，經公堂出票拘提，昨日解訊，奉會審判席粹甫先枷三天。特此佈告，各書坊、寶號幸勿誤售受累。是盼。李伯元直道勝訴，枷三日的外罰也不算輕，但由於國家主權發生與領事裁判權作祟，受外罰的口具

とんど同じ。ただ、このたび以下のふたつの見解を新しくつけ加えた。

1 海賊版を作成した主犯を特定した。日本東京金港堂が主犯で、中国に運送し代理販売したのが朝日洋行知新社だそう。（写真の上を参照。盗版者は日本東京金港堂，運往中国代銷的是朝日洋行知新社，……166頁）

2 李伯元が訴えたのは、「知新社主人弼本氏」ではなく「經理人（注：支配人、責任者）席粹甫」だ。つまり、弼本氏という名前を出したのが「日本人的狡猾之處（日本人の狡猾なところ）」で、弼本氏を訴えれば不平等條約下の領事裁判權によって事件は日本領事が審理することになる。すると李伯元の訴訟が負けるのは疑いがない。李伯元が會審公堂に届けて「經理人席粹甫」を被告にした理由は、裁判權を日本領事の手に渡さないのが目的だった、そうだ。（写真の下を参照）

どうしてこんなにグチャグチャと長くなるのかわからない。

上記新見解2点の根拠は、なにか。例の新聞広告だ。

利用する資料は、以前とまったく同じ。目を少し動かすだけで見つかるはずのそこにある報道記事を掘りおこしてもいい。陳大康なりの解釈を加えたところが該論文の新味だろう。その新解釈は、世界繁華報館の出した出版広告と犯人の出版広告を参照し、その中に出てくる単語を組み合わせて出てきたようだ。

検討する。

1の主犯が日本東京金港堂だというのは、ありえない。

ここになぜ日本金港堂が出てくるのか。陳大康は、まずそこを説明すべきだった。

海賊版の犯人は、出版広告において「東京金港堂」の出版物を「日商洋行知新社」が分売する契約を結んだとうたった。日商朝日洋行知新社が出したその広告の原文はこうだ。「東京金港堂与本社訂定該堂出版各書本社今為分售処」（『中外日報』1904.10.15）陳大康は明記していないが、たぶんこれが金港堂主犯説の根拠だろう。

陳大康は、広告に書いてあることをそのまま信用して来源も示さず論理を飛躍させた。すなわち海賊版の主犯は東京金港堂である。ならば、席粹甫は、どこから日本東京金港堂を引っぱってきたのかを陳大康は検討しなければならなかった。疑問に思わなかったのだろうか。疑問も感じなかったから勝手に利用したらしい。

実は、そう表現した広告文が存在する。商務印書館がそう宣伝した。

商務印書館は、日本金港堂と合併会社になった。しかし、合併した事実を公表しなかった。ただ、表向きは金港堂の販売代理店になったと言っただけだ。1903年12月30日付『申報』の自社広告で東京金港堂の名前を大きく掲げてそう宣言した。同時に1904年1月1日付『上海週報』では日本語でも宣伝している。すなわち、「弊社儀今般東京金港堂書籍株式会社と特約を結び在清国代理店として同社発行の出版物を取次ぎ手広く販売仕候間……日本東京金港堂代理店 商務印書館」である。

狭い上海租界という社会だ。席粹甫は、それを知っている。だから、実在する商務印書館の宣伝文句を盗用して自分のものにした。当時の犯人は、それくらいの知識は持っていた。

ところが現代の陳大康は、そのことを知らないらしい。1904年当時、商務印書館が金港堂との合併会社になっていた事実を把握していないとわかる。知っていれば、これほど奇妙な新見解を提出するはずがない。説明する。

商務印書館が刊行したのが雑誌『繡像小説』だ。その編集長に李伯元を招いたのが商務印書館の張元済だった。

横道にそれる、といっても李伯元に関連があるので書いておく。鍵語は「日本」である。陳大康と深いところでつながっている。

過去において、李伯元編集長説を否定し問題提起したのが商務印書館勤務の汪家燊だ。彼がその根拠にあげたのが、張元済の存在だった。張元済が、上海の花柳界で著名な、いわば品行

の悪い李伯元を自社が刊行する雑誌の編集長に招くはずがない、とずっと頑固に主張しつづけた。ところが、李伯元を招聘した、という商務印書館自身の出した新聞広告が見つかった。それを汪家燊に提示したが、彼は公には疑義と称してのりくりりと言い逃れとうとう認めなかった。証拠の資料を目の前につきつけられても、意識から閉め出し事実を認めない。もうほとんど信仰ではないか、と思ったものだ。2014年、樂偉平によって夏曾佑あて張元済の手紙が公表された。それには、李伯元の名前を出して、この人しかいない、と書いている\*5。

汪家燊説は、新聞広告の存在によってすでに否定されていた。加えて、張元済の手紙が出現したことにより完全に破綻した。

汪家燊のことを紹介したのは、いったん思いこんだらそれを自分で訂正するのはむづかしい、と考えるからだ。特に指摘しなければならないのは、汪家燊説に対して最初に反論を出したのは日本人の私だった。1984年に天津へ長期出張したおり、全国紙『光明日報』「文学遺産」欄に汪家燊への反論を投稿した。後から汪家燊本人から知らされたのだが、北京で職場の同僚から「日本人にやられたらしいな」と嫌味を言われたらしい。私の指摘を最後まで拒否しつづけたのは、たぶん背景に日本が存在したからだろう。陳大康も同類ではないかと思ひ当たる。

閑話休題。

商務印書館と合併している金港堂が、よりにもよって身近な主編者(編集長といっても同じ)、あの李伯元の著作を盗むだろうか。その理由がない。またその必要もない。

くりかえす。商務印書館が、小説雑誌刊行のためにわざわざ招聘したのが李伯元だ。陳大康の説明によると、その李伯元が執筆している『官場現形記』の海賊版を、彼が関係している合併会社の相手である金港堂が作成して販売したことになる。金港堂が主犯であれば、自動的に商務印書館も共犯者になる。陳大康が日本金



港堂を狙って放った矢は、結果として商務印書館を射ることになるのだ。日本人にむけたブーメランがもどってきて中国人を襲ってくる。なにかの悪い冗談にしか見えない。どこをどう押ししたら出てくるのか。陳大康はよくもこれほどの珍説を提出したものだ。それが学術雑誌で有名な『文学遺産』に掲載される。正常ではない。

2については、さらに理解しにくい。

李伯元は裁判に勝つために、主犯の日本金港堂ではなく末端人員の中国人席粹甫を訴えた。陳大康が言っているのは、そういうことだ。

そもそも主犯は日本金港堂ではない。金港堂に弼本氏などという奇妙な名前の社員はいない。もともと日本人の名前らしくない。おまけに本体ではなく尻尾を訴えたのでは裁判の意味がないではないか。尻尾を切っても本体を罰しなければ、海賊版は販売され続ける。陳大康が裁判というものを理解しているのかどうか怪しい。

新聞広告だけを見れば、世界繁華報館の許可を得て日本人が洋装の『官場現形記』を作成販売していると思う人もいるかもしれない。海賊版だと指摘されなければ、当時の一般読者はそう考える可能性はある。だが、上海租界内のことだ。出版人でもある李伯元は、海賊版を作成販売している主犯が中国人席粹甫だと見抜いている。だからこそ外国人が関係しない会審公堂に提訴した。そう考えるほうが無理がない。

もうひとつの注目点は、日本領事存在だ。

日本領事は、原告である世界繁華報館の広告に出てくる。陳大康は、『新聞報』光緒三十年十月初二日(1904.11.8)を示す。私は『中外日報』光緒三十年十月初七日(1904.11.13)で確認した(一部語句の異なる箇所がある)。

関係部分はこうだ。「前有朝日洋行出售翻刻本蒙日本領事諭令停賣并函請會審分府黃司馬將托銷之席粹甫伝案嚴訊并以附聞」

日本領事は、日本の朝日洋行に海賊版を販売するのを停止するよう勧告したばかりか、委託販売している席粹甫を法廷に召喚し厳重に尋問

するよう会審公堂に手紙で要請したという。ここからわかることは、原告中国人と被告であるはずの日本人が一緒になって事件を告発していることだ。陳大康には理解できない奇妙な光景に思えた。そこで陳大康は、これをペテンだ(只是騙人的話。166頁)と切り捨てる。説明することができないから罵った。日本領事がなぜ李伯元に協力しているのか。その意味を考えようとはしない。日本が悪い、という意識が出発点だからそうなる。

日本領事が中国人の李伯元と一緒にあって、中国人の席粹甫を告発していることのがペテンか。席粹甫が日本の商社、日本の出版社、日本人をかたって海賊版を販売している行為は、日本の名誉を毀損している。日本領事から見れば、席粹甫は日本を隠れ蓑にし、日本を貶めている。そういう犯人を裁判にかけようように働きかけるのは日本領事が当然やるべき仕事のひとつだ。

陳大康の新見解は、原告と犯人の広告をつきまぜ、内容を検討もせず、日中の合併会社という事実も知らず、独自の角度をつけて成立しているとしかいいようがない。まさか商務印書館とは合併相手である金港堂に濡れ衣を着せるとは、私は想像もしなかった。

陳大康は、新聞広告しか材料に使用していない、と何度もいう。最大の欠陥は、裁判事件だから報道記事も掲載されたのではないか、というところまで考えが及ばなかったことだ。私は、過去にそれを指摘したことがある。

裁判報道は、1904年11月22付で『同文滬報』『中外日報』『時報』の3紙に載っている。探せばほかにもあるだろう。

「繁華報館李伯元。控席粹甫冒日本人名。翻印官場現形記」「繁華報館前控席粹甫冒日本人名翻印官場現形記一案」などとはっきり「日本人の名前をかたる」と書いてある\*6。

日商朝日洋行、日本知新社など、あるいは日本人の名前にはありそうのない弼本氏とか、す

べて席粹甫がでっちあげたと考えるのが普通だし自然だ。どこにも疑問点はない。裁判結果がそれを証明している。

陳大康は、裁判報道記事という重要資料が存在することに気づかないまま、そこにある出版広告の単語だけをこねくりまわしただけ。記事を吟味してはいない。そうして新見解、いや珍説を作りあげた。

陳大康はどのようにそこまで奇妙な方向に突き進んでしまったのか。

鍵語は、汪家燊のはあいと同じ「日本」だ。

陳大康が以前に書いた文章では、広告の途中で日商朝日洋行、日本知新社の名前が消失したことを不思議がっていた。裁判が結審して日本人弼本氏が罰せられなかった点を「勝利したとはいえいくらかふがないものである(有点窩囊)」とも表現した。ここに理由があるようだ。

つまり、陳大康は、海賊版の作成販売は日本、および日本人の犯行だと最初に思いこんでしまった。だから、それにあわせて新聞広告を理解しようと努力した。立論の出発点が誤っている。そのことに陳自身は気づかない。今も理解していない。

原告の李伯元と一緒にあって海賊版の販売停止を勧告した日本領事は、犯人が日本人ではないと把握しているからそうしている。だが、陳大康から見ると日本人のペテンだということになる。

李伯元は、はじめから主犯が中国人席粹甫だと認定して直接会審公堂に提訴している。それにもかかわらず、陳大康にいわせると、弼本氏を出してきたのは、提訴先を変更させるために日本人が画策したことだ。「這正是日本人的狡猾之処」ということになる。日本人なら、ありそうもない「弼本氏」などは名のらない。陳大康はそれにも気づかない。

陳大康は、金港堂と商務印書館、あるいは李伯元との関係について無知だからこそ立論することができた。押さえるべき資料を取りこぼし

たまま、目の前の新聞広告だけをこねくりまわして珍説を開陳したと言わざるをえない。

日本東京金港堂が海賊版作成の主犯である、とどうしても主張するのなら、陳大康にはその具体的な証拠を提出する責任と義務がある。ただちに実行してもらいたい。

もうひとつ気になる点について再度指摘しておこう。

陳大康は、海賊版の著者である日本吉田太郎という名前をどこにも出していない。劉穎慧も同様だった。阿英目録に記載があることは、すでに触れた。にもかかわらず、言及しない。過去もそうだったし、今回もそうだ。どういうことか。言わない、あるいは言うことができないのは、日本知新社の海賊版『官場現形記』そのものを見ていないからだろう。

海賊版を論じて、海賊版そのものを見ていないということがあるのだろうか。実物を手にするのが基本だろう。中国の学界は、そういう手抜きを許すのか。疑問に思うほうがおかしいので、それが中国では当たりまえと言われたらどうするのだろうか。

広告に「日本」という単語を見た瞬間に陳大康の思考は停止したらしい。悪いのはすべて日本だという結論が最初から下されているように見える。この時点で、研究論文ではなくなった。資料の裏付けがない立論は、一般に妄想という。資料を収集することと研究論文を書くことは、別物だという証拠だ。

汪家燊は、日本人からの指摘に立腹して目の前の現実を見失った。陳大康は、日本という単語に過剰反応を示して事実追及を放棄した。根は同じだ。

学術誌『文学遺産』は、論文審査をほんの少しだけ厳密にする必要がある。

そこで劉穎慧『晚清小説広告研究』(北京・人民出版社2014.9)が登場する。

2006年に発表された劉穎慧の論文は、新聞広告を丁寧に収録して海賊版事件の流れを最初に

明らかにした。私が高く評価する理由である。

8年後の著作だ。その中の「李伯元《官場現形記》版權訴訟」(90-98頁)において展開した文章は、海賊版裁判関連についていえば以前と変化がない。まったく進展していない。使用する資料も新聞広告だけで、同じものを提示するのみ。裁判で下された判決の報道記事も探していないし、吉田太郎の海賊版そのものにも言及がない。そこは陳大康と同じだ。

以前と同様だから不十分な点はある。だが、劉穎慧は、広告から理解できる事実のみを述べて冷静である。劉の指導教授の陳大康は、同じ資料を使い、広告の字句だけを見て、主犯は日本金港堂だ、日本領事のペテンだ、日本人の狡猾なところだ、などと証拠もなく奇妙な作文をし珍説を公表した。それに比較すれば、劉穎慧の文章は、良質であるということが出来る。

海賊版問題についての私の論文も、ウェブサイトで公開し世界にむけてに発信している。だが、受信しなければ、役に立たない。日本では、コンピューターを使用した情報収集を苦手とする人を情報弱者(略して情弱)というそうだ。そういう人たちに、私から手助けできることはなにもない。罍

## 【注】

- 1) 樽本「『官場現形記』裁判」『中国文芸研究会会報』第33号1982.4.1、11-13頁。要旨：「官場現形記」をめくり、李伯元の遺族と歐陽鉅源の間に裁判めいた事件が発生する。『世界繁華報』の経営から歐陽鉅源が追い出されそうになったこと。「官場現形記」の海賊版を出した出版商が訴えられたこと。裁判官は、出版商に版權を買い取らせ遺族に金を支払い、新聞の経営は歐陽鉅源に任せることにした。遺族、出版商、歐陽鉅源ともに満足する結果となったことを述べる。本論は、中国語訳された。
- 2) 陳大康「歴史上の小説盗版案」ウェブ版。『文匯報』2007.2.27。あるいは2006.10.10、11.24。海賊版『官場現形記』について劉穎慧論文と一部分が重なる。
- 3) 樽本「『官場現形記』裁判の真相 日本を装っ

た海賊版」『清末小説から』第90号2008.7.1、1-19頁。要旨：『官場現形記』の海賊版については、いくつかの候補をあげたことがある。当時の新聞を調査した。ただし、私の努力と資料が不足しており特定することができなかった。その後、中国の研究者劉穎慧が新聞を調査して裁判の時期を特定した。それに触発され、再度調査を行なう。新聞のマイクロフィルムを入手できるようになったのが研究状況の大きな変化である。その結果、いくつかの新しい新聞記事を見つけることができた。先行論文では言及のなかった資料だ。「官場現形記」裁判は、日本人になりすました中国人を裁くものであった。裁判がどのような経過をたどって落ち着いたかを新聞の広告と報道記事によって明らかとする。

- 4) この箇所の文章は、2015.4.20付で清末小説研究会ウェブサイト公表したものと重なる。
- 5) 清末小説研究会ウェブサイトに掲げた文章をつぎに示す。

2014.3.14

樂偉平「夏曾佑、張元済与商務印書館の小説因縁拾遺 《繡像小説》創辦前後張元済致夏曾佑信札八封」(『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期(総第174期)2014.1.15)に興味深い手紙が収録されています。

商務印書館の張元済が、夏曾佑にあてた手紙8通を紹介して、おそらく新発見でしょう。

『繡像小説』の主編者問題に関連します。

経過をざっと説明すれば、こうです。

『繡像小説』の主編者といえば、世界繁華報館の小説家李伯元ということになっていました。

1980年代に汪家燾が、李伯元ではない、と異議をとえます。

李伯元ではない理由のひとつが、彼の「悪い評判」でした。

李伯元は花柳界の指導者(花界領袖)だった。そういう人間を張元済が雑誌の主編者に招聘するわけがない。

それでは誰が『繡像小説』の主編者なのか。汪家燾が従来の李伯元にかわって提出したのが夏曾佑でした(汪家燾「《繡像小説》及其編輯人」『出版史料』第2輯1983.12そのほか)。

それに日本の樽本が反論し、やはり李伯元だ。こうして論争がはじまったのです。17、18年間くらい続いたでしょうか。

問題はすでに解決しています。

証拠は、1907年の新聞広告です。商務印書館が、『繡像小説』の主編者は南亭亭長(すなわち李伯元)であると自社広告で公表しているのです。

ただひとり汪家燊だけが、現在にいたるまでその資料の意味を認めていません。研究者としていかなものか、と思います。

今回の新出資料によると、張元済は夏曾佑にあてた手紙のなかでつぎのように書いています。

「商務館現求助於繁華報館主人李伯元，其筆墨亦平淺，然此外更無人」

執筆の日付は、いうまでもなく旧暦の「四月朔」。樂偉平が注するように新暦1903年4月27日で間違いのないと思います。

『繡像小説』の創刊が同年旧暦五月初一日ですから、それ以前の情況を書いている。

張元済自身が、李伯元の名前を出して援助を求めている。しかも、この人しかいない、とまで言っているのがわかります。

まずこれで李伯元主編者説は、より強固なものとなります。

しかも、夏曾佑あての手紙です。汪家燊が提出した、主編者は夏曾佑である、はあきらかに間違い。

6) 参考までに引用する。『中外日報』1904.11.22 「抗伝枷示 繁華報館李伯元。控席粹甫冒日本人名。翻印官場現形記。奉伝三次。席抗不到案請究。司馬判席枷示三天。以為抗伝者戒」 / 『同文滬報』1904.11.22 「抗伝枷示 繁華報館前控席粹甫冒日本人名翻印官場現形記一案曾由黃司馬飭差伝訊乃被告屢伝不到司馬即飭差協探往提昨晨到案司馬以席藐視公堂抗伝不到大怒判先枷示三天期滿再行訊究」 / 『時報』1904.11.22 「翻刻書者枷示衆 翻刻官場現形記之席粹甫前奉公堂伝訊乃竟抗不到案而又明目張胆登報出壳實屬藐視已極嗣經黃司馬出票拘提昨日早堂由捕房解請訊懲奉堂判先行枷号三天以為抗伝者戒至其翻刻存案書籍以及日本領事函請追究假冒東洋人各節真行訊究(後略)」

## 林紓冤居事件

“琴南移寓芝麻街”是否指林琴南？

古 二 德

近年來，許多研究者已開始承認前學者胡適、鄭振鐸、魯迅等對林紓的“冤罪事件”。樽本照雄所從事過的“林紓冤罪事件”研究，覆蓋莎士比亞、易卜生、斯賓塞、塞萬提斯林譯及北大蔡元培解僱陳獨秀事件。“林紓冤罪事件”是由於訴諸權威、查證原始資料不足及不加批評地輕信偽證的原因而造成。

然而，除林譯冤罪之外，現今還出現了一件“林紓冤居”事件，能追溯到《宣南鴻雪圖志》(中國建築工業出版社，北京，1997年)及肖復興著《芝麻街：林琴南故居》(原刊於《新民晚報》，2005年12月13日，未見，收入《藍調城南：老北京的記憶》，十月文藝出版社，北京，2006年，頁50至52，筆者取證該書)。據肖復興所說，林紓不僅住永光寺街寓所，晚年至死的林琴南還“移寓芝麻街”。筆者在寫作陳家麟小傳時，發現1912年林紓北平居住地與陳家麟住處“鄰毗”，<sup>1</sup>因此肖復興論文引起了筆者注意。肖復興並不是歷史學家，而且他的《芝麻街：林琴南故居》亦不收入學術刊物，但是因為不止有一

<sup>1</sup> 哈葛德著，林紓、陳家麟合譯，《古鬼遺金記》，刊於《庸言》1卷第1號，1912年12月1日，頁122，原本缺乏連續頁碼。

位專業研究者將肖復興之文視為參考文獻，<sup>2</sup>筆者認為糾正林紓故居的錯誤是非做不可的。

### 永光寺街故居

關於林紓永光寺街故居有大量的史料。鄭逸梅（1895-1992）記錄民國十年林紓的“更定潤格一紙，如五尺堂幅二十八元，五尺開大琴條四幅五十六元，三尺開小琴條四幅二十八元，鬥方及斂折扇均五元，單條加倍，手捲點景均面議。限期不畫，磨墨費加一成，件交北京永光寺街林宅”。<sup>3</sup>林紓孫子大文先生亦證實永光寺街林居的信息：

現在遺留的痕跡，你看就剩了粉筆字所寫的永光寺東街30號。這個門只能代表這個街了。<sup>4</sup>

肖復興增加關於林紓故居的兩本古籍資料，陳宗蕃《燕都叢考》及張江裁《燕京訪古錄》：

《燕都叢考》中引民國時期張江裁《燕京訪古錄》：“順治門外永光寺街，有畏廬在焉，吾師林琴南先生故居也。先生僑居北平三十餘年，終老在此。其門楹有自書聯云：‘捫心只有天堪恃，知足當為世所容。’”（頁50）

肖復興所引用的短語出於陳宗蕃《燕都叢

考》第三編第三章。<sup>5</sup>雖然陳宗蕃書籍收集不少張江裁（1908-1968）《燕京訪古錄》的引語，不過這一特定短語無法找到。筆者詳盡無遺地閱讀《燕京訪古錄》（1934年1月初版），亦使用電腦搜尋功能在電子版尋找所引的每詞。因為該書很薄（共有93頁），詳細閱讀並非難事，筆者能確認此中沒有關於林紓故居的信息。張江裁祇提及林紓兩次：

及郭死。彭君（注：彭翼仲，1864-1921）葬之於此。並題醉郭先生之墓。以誌不忘。先師林琴南先生曾為文記其事。祝椿年為之書於碑陰。（〈陶然亭〉，頁39）

自今以往。過經楸樹。望陰懷感。楸樹有知。亦助餘悲也否。嗚呼。余連遭師友瘦公（注：羅惇齋，1872-1924）琴南白水（注：林白水，1874-1926）之痛。又嘗侍諸公遊。傷今懷古。不禁臨風惆悵。淚涔涔下。（〈棗花寺廟〉，頁43）

除此之外，《燕京訪古錄》所描述的“順治門外”地點共有“前孫公園”及“潘家河沿南口”（頁13），並沒有“順治門外永光寺街”。為了保證張江裁沒有說到林紓故居，筆者亦檢查《京津風土叢書》，其中含張江裁的18本書，祇有《京津風土叢書》中含民國江寧管之樞著〈東莞張次溪先生傳〉一篇，如下：

次溪（注：張江裁）侍深夜弗倦，時年方垂髫許為大器、未弱冠、有神童名，當代宿儒，如新城王晉卿，桐城馬通伯，義寧陳散原，侯官林琴南。（周作人題版，年份不詳，標點符號被增加，頁1）

陳宗蕃《燕都叢考》採集許多古籍善書，該短語出於非張江裁作品未嘗不可，但筆者無法探

<sup>2</sup> 蘇建新，〈林紓在京寓所新考〉，《福建工程學院學報》8卷第2期，2010年，頁165至167。

<sup>3</sup> 鄭逸梅，〈林琴南賣畫〉，收入《鄭逸梅選集》，黑龍江人民出版社，哈爾濱，1991，第4冊，頁121。另參劉大治〈書畫家自訂潤例〉，收入陳建才編者《八閩掌故大全：藝文篇》，福建教育出版社，福州，1994，頁265。

<sup>4</sup> 劉義萍。《林紓》，海峽衛視於2007年8月6日、13日、20日20時30分連播，引用於蘇建新，〈林紓在京寓所新考〉，頁165。

<sup>5</sup> 陳宗蕃，《燕都叢考》，北平，1931，三編，頁31，1991年北京古籍出版社再版，頁507。

明。

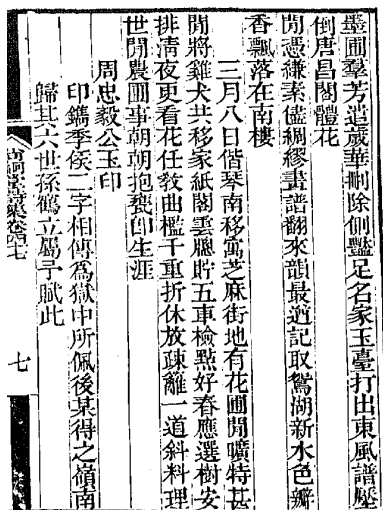
肖復興與芝麻街故居

除了永光寺街之外，肖復興亦斷言芝麻街有林紓第二座故居：

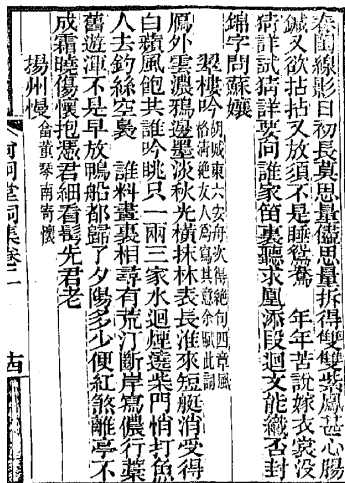
同樣一本《燕都叢考》引《尚綱集》說：  
“攜琴南移寓芝麻街，地有花園，間曠特甚。”（頁50）

該短語亦出於《燕都叢考》第三編第三章，<sup>6</sup>但肖復興引語必須略微修正：《尚綱集》該書不存，實名即劉嗣綰著《尚綱堂集》。其中十三冊卷四十七有〈程春廬屬題其夫人花卉冊〉一篇，說道：“三月八日偕琴南移寓芝麻街”（頁7a，插圖一）。<sup>7</sup>不過這位“琴南”是真正清末民初福建翻譯者“林琴南”？

《尚綱堂集》作者劉嗣綰於1821年逝世，當時林紓未出世，何來遷居？這位“琴南”的身份出於《尚綱堂集》十六冊卷二中有〈揚州慢〉一篇文章，題下有副標題〈龔董琴南寄懷〉（頁14a，插圖二）。因此能容易地斷定“移寓芝麻街”的琴南為清末詞人董國華（1800-1850），字琴南，號榮若，江蘇吳縣人。



插圖一 《尚綱堂集》13冊卷47，頁7a。



插圖二：《尚綱堂集》16冊卷2，頁14a。

因為肖復興認為《尚綱堂集》中的“琴南”暗指林紓，導致他再造出一件張江裁冤罪事件：“但張說林琴南‘終老在此’，恐怕不確”（頁50）。肖復興的意思是，因為林紓“移寓芝麻街”，所以張江裁所說的“順治門外永光寺街，有畏廬在焉，吾師林琴南先生故居也。先生僑居北平三十餘年，終老在此”不確，林紓沒有終老住永光寺，但“後移居芝麻街”（頁50）。問題如此：“終老在此”表示終老在北平，因為“此”的先行詞是“北平”，而不是“永光寺街”。

### 林紓冤居事件的起源

最後，肖復興再提供新史料：

我是按照《宣武鴻雪圖志》中的地圖來找的，那上面明確地標明，林氏故居在路北，緊靠着川西會館。（頁52）

《宣武鴻雪圖志》既是何書，筆者無法查明。該書至少引用於兩本重要資料：吳良鏞於〈關於北京市舊城區控制性詳細規劃的幾點意見〉（1998年刊於《城市規劃》2期，頁7）說，“現在，《宣武鴻雪圖志》——一部記載北京宣武區建築文物的優秀圖書已經出版”。另外，王慶《北京大柵欄傳統商業區的保護與發展》（北京建築工程學院，2003）碩士論文附上中國建築工業出版社1997年

<sup>6</sup> 同上註，三編，頁88（1991年版，頁575）。

<sup>7</sup> 朱一新《京師坊巷志稿》，卷下，393節（頁碼不詳）亦引用《尚綱堂集》中的句子。



出版《宣武鴻雪圖志》頁323的圖片（插圖三）。不過中國建築工業出版社沒有出版該書。<sup>8</sup> 1997年該社出版的是《宣南鴻雪圖志》，不僅年份符合吳良鏞、王慶論文，而且王慶所附的圖片原來出於《宣南鴻雪圖志》此書（插圖四）。因此能推測肖復興所引的史料為《宣南鴻雪圖志》。

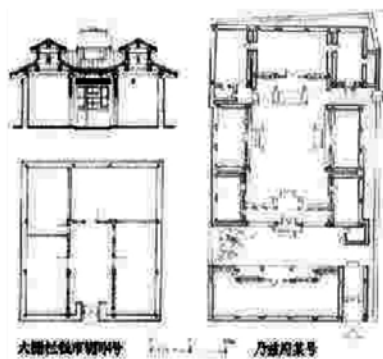
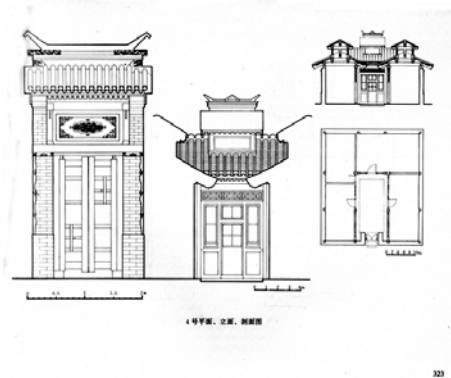


图 1-6 大柵欄的小四合院與內城標準四合院的尺寸比較  
資料來源：左. 王世仁 主編. 宣武鴻雪圖志. 中國建築工業出版社. 1997. 323 頁  
右. 陸翔 王其明. 北京四合院. 中國建築工業出版社. 1996

插圖三：《北京大柵欄傳統商業區的保護與發展》頁13。

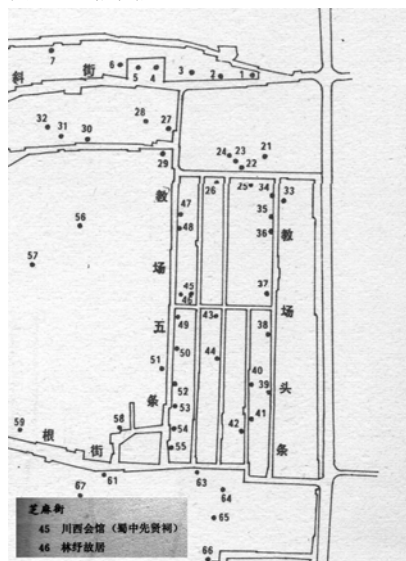


插圖四：《宣南鴻雪圖誌》1997年，頁323。

《宣南鴻雪圖志》此中雖沒有“林氏故居”，但還有一張當代地圖含芝麻街的“林紓故居”（頁66，46號，插圖五）。蘇建新亦指出筆者未見的《北京百科全書宣武卷》（2002年），此中介紹林紓故居如此：“林琴南在北京的兩處故居均在宣武地區。一處在芝麻街”（頁碼不詳）。該書

<sup>8</sup> 筆者與中國建築工業出版社職員私人通信（2015年6月9日），出版社確認沒有出版《宣武鴻雪圖志》。

中所示的芝麻街林紓故居由何起源？《宣南鴻雪圖志》中的〈主要參考文獻〉（頁507）之內有“《燕都叢考》陳宗藩編著 北京古籍出版社，1991年版”的文獻信息，因此可以推論《宣南鴻雪圖志》地圖上的芝麻街林紓故居源於陳宗藩《燕都叢考》。再者，陳宗藩《燕都叢考》第三編第三章附加一張地圖，與《宣南鴻雪圖志》地圖非常相似（三編，頁78至79之間，1991年版附於頁566，插圖六）。



插圖五：芝麻街地圖，刊於《宣南鴻雪圖志》，頁66（圖例被變位）。



插圖六：芝麻街地圖，刊於《燕都叢考》第三編第三章，頁78至79之間（1931年版）。

由此筆者推論出如下：2005年，當肖復興論文先刊於《新民晚報》時，已有兩本書記錄芝麻街林紓故居：《宣南鴻雪圖志》與《北京百科全書宣武卷》。該書均依據於陳宗藩《燕都叢考》中所引用的“琴南移寓芝麻街”。這一特定短語原出於《尚綱堂集》，但因為作者沒有檢查原文，把《尚綱堂集》中的“琴南移寓芝麻街”誤為“林紓故居”。實則這位琴南乃是清末詞人董國華。肖復興錯誤亦源於此事。林紓原來沒有居住於芝麻街。

罍

César Guardé-Paz

学学報(哲学社会科学版)』2013年第3期 2013.5.15

李欧梵、橋本悟 「從一本小説看世界：《夢遊二十一世紀》的意義」『清華中文學報』第12期 2014.12 電字版

付 建舟 『清末民初小説版本經眼録・日語小説卷』北京・中国致公出版社2015.1

「清末民初日語小説漢訳本与中国文学の現代転型(代前言)」付建舟 『清末民初小説版本經眼録・日語小説卷』北京・中国致公出版社2015.1

『清末民初小説版本經眼録・俄国小説卷』北京・中国致公出版社2015.1

「清末民初俄国小説訳介路径綜考(代前言)」付建舟 『清末民初小説版本經眼録・俄国小説卷』北京・中国致公出版社2015.1

白須留美 「包天笑の翻訳小説『赤死病』について」『佛敎大学大学院紀要 文学研究科篇』第43号 2015.3 電字版

張 成軍 「屠格涅夫小説在中国的經典化之路探析 “五四”至建国前屠格涅夫小説在中国的傳播研究」『広東開放大学学报』2015年第2期(第24卷総第110期) 2015.4.20

方 麗娟 『被發現的兒童 中国近代兒童文学拓荒史』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2015.5

劉 堃 「論晚清小説“妓女”与“貞女”形象的并置現象」『中国現代文学研究叢刊』2015年第5期(総第190期) 2015.5.15

## 清末小説から

崔文東氏よりご教示 いただきました。感謝します

張 偉 『紙韻悠長 人与書の往事』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2009.3

楊 凱 『中国近代報刊中の翻訳小説研究(1872-1911)』華東師範大学2006.11  
2006届研究生博士学位論文

蘇 亮 「改良小説社研究初探」『華東師範大

『清末民初小説目録X(エックス)』を公開準備中です